

持ちになりました。

資料館の中には、いろいろな展示室がありました。戦争で何があったのかを記した、当事者のことばをずっと読んでいた母は、

「米軍が上陸して、一般の人がどれだけつらく大変な思いをしたかわかった。」

と、暗い顔で言いました。住人の受けた惨劇の様子をガマと呼ばれる穴の中で見た時、ぼくは同じ人間なのに敵とみなして、残こくな手段で殺す事をする人間のおそろしさを感じました。人の正しい判断をくわらせてしまうのが、戦争なんだと思いました。

社会の授業で一番最初に、戦後作られた日本国憲法三つの柱を学びました。沖繩に来て「平和主義」の意味が少しわかったような気がします。

沖繩の平和のいしじは、

「世界の恒久平和を願い、国籍や軍人、民間人の区別なく刻まれた。」といえます。ぼくの考える平和主義とは、

「生まれ、性別、障害の有無に関係なく、人々が平等にくらせること。むだな争いをしないこと。人をきずつけず誰もがお互いの人権を守ること。」

だと思えます。

テレビからは、毎日のように国同士の争いが報じられます。ぼくはこれからもっと世の中の様子に興味を持ち、知った事に自分なりの考えを持つていこうと思います。そして、戦争で苦しむ人や悲しい思いをする人のいない世界になってほしいと思います。

## 特攻の真実と私の正義

第一中学校 三年

植松 れいみ

大空へ駆け出す飛行機

連合軍に体当たりする

生きて帰ることは許されない

圧倒的な恐怖

過酷な運命

出撃命令

戦場で命を散らす

名誉と勝利

生き残る可能性のない特攻

本当は死にたくない

家族と共に生きていたい

自分の夢を叶えたい

誰も止められなかった

特攻の真実

儂く消えた命

戦争のない時代

当たり前のように生きている

学校へ行き

勉強し

くだらないことで友達と笑う

自由と平和

命懸けで守られた

思いを託された人として

生きていかなければいけない

運命を大きく変える力

無限大にある可能性

なぜ生かされているのか

考えなければならぬ

自由と平和が当たり前であること

それが正義だと信じているから

## 醜いこの世界

第一中学校 三年

大沼 柚稀

私はこの世界が嫌いだ。

一九四五年第二次世界大戦末期に沖縄諸島に上陸した米軍・英軍を主体とする連合国軍と日本軍との間で戦いがおきた。これが沖縄戦だ。連合国軍の目的は太平洋の島々を奪い、次に沖縄を占領し日本本土を攻めるための前進基地にするためだった。それに対し日本軍は連合国軍を引き止め時間を稼ぐ作戦に出た。これにより沖縄戦は開戦。悲劇の始まりである。

この沖縄戦は軍隊と軍隊、軍人と軍人が戦うだけではなく沖縄に住んでいた民間人も巻き込む戦いだった。武器を持った米軍に対し民間人はなすすべもない。そんな中で起きたのが「集団自決」だ。当時の日本軍には「捕まるくらいなら死を選べ」という考えが大切とされていた。大怪我を負って洞窟に寝かされたたくさんの方々の軍人に毒が入った飲み物が配られたこともあったそうだ。

一方で私達のような民間人にも集団自決はあった。日本軍は「住民も役所も兵士と同じように命をかけて国を守れ」という指導方針をとって住民が米軍に降伏することも許さなかった。今ではおかしいと思える。それこそが今平和であることの証明なのだと思う。当時はそんな

平和ではなかった。きつととても辛かっただろう。あたりで発砲音が響き、家族や友が血を流し倒れる姿。それを見て、想像してこの世界に絶望して夢も希望も持てず、同じところへ行きたいと願い、自ら死を選んだ人が大勢いる。そんな中、奇跡的に生き残った、生き残ってしまった人がいる。

集団自決のほとんどが手榴弾による自決だった。日本軍からの伝令を受け手榴弾が配られる。周りの人がみな「天皇陛下万歳！」と叫び、その直後避難した洞窟のあちこちで手榴弾の爆発音が響き渡る。多くの人が次々に吹き飛んでいく。しかし手榴弾の半数以上が不発だった。手榴弾が不発に終わった人々は混乱。パニックに陥りあらゆる手段を使って殺しが行われた。母が弟が友人がどんどん殺されていく中、殴られ気絶し目が覚めたときには周りには血の海が広がっている。そんな光景が思い浮かぶだろうか。私ならば耐えられずなおも死を選択するだろう。家族がいない世界で生きたいと思えない。

生き残った人には心に深く消えることのない傷があった。

「毎年、集団自決があった日が近づくと眠れなくなってしまう。寝ても棺桶が並んでいる夢を見るし、体調が悪くなってしまう。寝ても今でも思い出す。」

と。その人たちの中には、そんな壮絶な体験を誰にも話せず今も一人その荷の重さに苦しんでいる人がいる。それほどまでに精神状態を悪化させてしまうのだ。だが、

「今話さなければあのことか分からないってしてしまう。」

と固い口を開いてくれる人がいる。家族がいなくなっても生きようと

思った人が、後世に戦争の恐ろしさを、絶望を伝えるために生き続けてくれた人がいる。その人たちのおかげで私たちは沖繩での戦いで何があったのかを知ることができるのだ。

戦争が起きることで亡くなる人、生き残る人、どちらも辛く苦しい思いをする。それでも国のために人は命を簡単にさし出すのだ。戦争は人間の汚さがよく見える。何も生まずただなくなってしまうだけなのが争いであり逃れられないものだ。

戦争の絶望や後悔を後世に残すことで、それを体験する人が少しでも減れば、少しはこの世界が好きになれるかもしれない。

## ヒロシマの中学生

第一中学校 三年

萩原 万里奈

中学三年生になり、戦争について学習する機会が増えた。もちろん一番多く学習したのは社会の授業中だ。日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、日中戦争、太平洋戦争、第二次世界大戦……。またそれだけの戦争の終結後には、必ず条約が結ばれる。下関条約、ポーツマス条約、ヴェルサイユ条約、サンフランシスコ平和条約……。正直なところ多すぎる。覚えるのが大変という思いもあったが、それよりも、私の頭には多くの疑問が浮んだ。「なぜこんなにもたくさん戦争を起

こしたのだろう。』や『なぜ条約を結んだにも関わらず、再び戦争を起こしたのだろう。』などだ。歴史の教科書には淡々と『戦争が起こりました。』、『戦争は終わりました。』と書かれているが、その裏には多くの人の死がある。兵士だけでなく、民間人まで。そう、私達と同じ中学生も犠牲になっている。戦争は許しがたく、決して忘れてはならない世界の歴史だ。

実は今までに学んできた戦争に関する文章で、一番印象に残っているのは、中学三年生の英語の教科書に載っている日記だ。それは広島市に住んでいて、中学一年生で原爆の犠牲になってしまったある男子の日記である。彼の残した最後の日記は、一九四五年八月四日のもの。そう、原爆投下の二日前だ。

彼の日記には当時の学生のリアルな様子がかかっていた。彼らの学生生活は、私たちと似ている部分もあったが、残念ながら戦争の影響を受けてしまった部分の方が多かった。四月頃は授業を受けている様子も書かれていた。しかし、夏頃になると作業場で働いたという内容が多くなっていった。そしてご飯は、さつまいも、びわの実、えんどう豆など……。今の私たちの生活からは考えられないような少ない食事だった。それでも彼は、たくさん食べられてよかったですと記していた。読み進めるうち胸が痛くなった。私たちよりも若い子が、戦争のため、国のために授業を受けられず、働いていたのだ。十分な食べ物も得られない中、働いていたのだ。しかも、彼らが働いていたのは、八月六日に原爆が投下された爆心地から、わずか五十メートル程しか離れていない所だった。爆心地から五十メートルで被爆した彼らの最期は、

想像以上に残酷で無残なものだった。戦争を中学三年生で多く学習する理由が分かった気がした。決して幼子には理解できない、受け入れられないものだからだ。彼らはなぜ亡くならなければならなかったのか。自らの勉強よりも国のために働いていた彼らが、なぜ亡くならなければならなかったのだろうか。原爆は、いや戦争は、罪のない人の命までも奪う、許しがたい世界の歴史だ。

私たち中学生はもちろん、今の日本で働いている多くの人が戦争を経験していない。世界唯一の被爆国である日本には、戦争の悲惨さを世界に伝える責があるはずだ。数多くの戦争を過去の出来事として捉えるのではなく、日本に関係のある、自分にも関係のある自分事として捉えて考えたい。世界では今でも地域紛争が続いている。領土を巡って、資源を巡って、民族や宗教の違いなど様々な対立からだ。「なぜ多くの悲劇があったにも関わらず、また繰り返すのか。」と彼らに聞いた。一介の中学生に過ぎない私には、彼らを止めることは恐らくできない。だが、多くの中学生の声ならどうだろうか。小さな力でも、たくさん集まれば大きな力へとなり得る。まずは、世界の今から目をそらさないことから始めよう。

# この日常を守るために

第二中学校 三年

新谷 やこ

私たちの日常生活には平和が当たり前のよう存在しています。しかし、実は平和はたくさんの人々の努力や犠牲によって守られているのです。

平和とは、戦争や紛争がなく、人々が安心して暮らせている状態です。平和が当たり前のあるからこそ私達は学校へ行けたり、帰ることができる家があったり好きなことに没頭することなどができるのです。しかし今もどこかで戦争や飢餓に苦しみ、安心して寝られない夜を過ごしている人々があります。

私はこの夏たくさん戦争のドキュメンタリーを見ました。沖縄戦を経験した人々が涙ぐみながら当時の状況を語る姿に私はとても胸が痛みました。戦争は戦争を経験していない私達には想像もつかないほど、悲しく、辛く、悲惨なもののだと強く感じました。しかしそれと同時に、この経験があったからこそ今の私達の生活が守られているということも感じました。この平和な日常は当たり前ではない。だからこそこの生活をどう守れるか、そしてより平和になるにはどうしたらよいか考えていきたいと思います。

まず、平和がどれだけ大切なのかを理解することが重要だと考えま

す。そのためにはたくさん過去の過去におきた戦争に触れることです。どのように起こり、どのようなことが起こりどれだけの数の人の命を奪ったか、そして他人事ではなく自分事のように受け止め、今ある生活に感謝をし、平和の大切さを理解することが重要です。

そして、平和は一人一人が心から願い、行動することで築かれています。自分たちができることを見つけ、それを実践していくのです。例えば家族や友達を心から大切にしたり、他人を思いやりたり、差別やいじめを許さなかったりと小さなことでも大切な一歩になるのです。また、自分自身の夢や目標に一生懸命になることも平和を築く一つの手になります。自分が幸せで充実していることで、自分に余裕ができ、他人を気遣うことができ、周りの人達も幸せを感じることもできるのです。

さらに、平和を守るためには教育も重要です。私たちが学校で歴史を勉強することで、知識や情報を得る、ということはまた一つの平和を築くための力になると思います。また歴史だけではありません。道徳や沼津市特有の言語読解を学ぶことで他人への思いやりや様々な視点からの物事に対する考え、異文化や異なる価値観への理解などたくさんのお話を学ぶことができます。実際、私も精神年齢が上がったというのもあるとは思いますが、学校でのこの学びがあったからこそ、友達との衝突を減らすことができたり、中学でも言語読解の授業後、クラスの雰囲気がとてもよいものだと感じることができています。このように教育は人々の心を豊かにし、平和への理解を深めることができます。



また、広島や長崎に原爆が落とされた八月六日、九日そして終戦記念日である八月十五日などに、少しの間だけでも黙祷を捧げ、戦争で亡くなった方に対して弔いの意をこめて祈りを捧げることもとても大事になってくると思います。

このように私たち一人一人の意識や行動が未来の平和を築いていく大きな力になります。私は将来、社会の一員として平和を守るための責任を持つことになると思います。だからこそ、自分自身を大切にしておいて他人を思いやり助け合う心を持ち続けていきたいです。そして平和を願う心を忘れず、みんなに笑顔届けられる、そんな人間になりたいです。

## 希望の輪を広げるために

第二中学校 三年

長谷川 寧 音

今日は八月六日。いつもより少し早く起き、家族でテレビを観る。すると、黙祷という言葉が聞こえ、家族みんなで目をつぶった。時刻は八時十五分、七十九年前の今日、広島から一瞬にして平和が、いつも通りの日常が奪われた。美しい自然も、人々の笑顔も、一つの爆弾が、すべてを灰にしてしまった。

私が初めて原子爆弾について知ったのは、小学二年生の時だ。小学

校の図書館に、戦争の本というスペースがあり、興味本位で読んでみた。当時まだ七歳だったこともあり、文章の内容は理解しきれなかったが、大きなキノコ雲と真っ赤にそまった人々の絵が印象的で恐ろしくなってしまう。本をとじたが、しばらくして怖さよりも興味が勝ち、戦争、原爆の本を読むようになった。そのおかげか、小さいころから原爆が広島・長崎におとされた日、終戦記念日はいつもおぼえていて、かかさずテレビで平和式典を観るようになった。話の内容は毎年異なるが、必ず共通して言っていることが、「平和は祈るだけでは造れない」ということだ。原爆や戦争のようなつらいことをくり返さないためには、ただ平和を祈るだけでは、なにも変わらないと思う。

最近、英語の授業で広島に住んでいた中学生が書いた日記を読んだ。その日記の内容は、授業の様子や仕事のこと、友人との会話など、戦争とは何にも関係ないようなことばかりだった。日常的な出来事がずっと日記に書かれていた。その日記を読んだとき、私は、原爆はとても残酷だと改めて感じた。原爆が投下されるなんて知らなかった人々は、原爆がいきなり落ちてきて、どれだけ怖かっただろうか、そんな気持ちでいっぱいになった。

このような悲劇を経験した人々、残された遺族の方々のことを考えると、やはり私たちは絶対にこの悲惨な出来事を忘れてはいけない、くり返してはいけないと思う。そのために大切なことは原爆について学ぶことだと思う。いちばん良くないことは、原爆投下を過去の出来事だと決めつけ、知ろうとせず、風化させることだ。だから、原爆に限らず、まず何ことも知ること、学ぶことが平和への第一歩だと思う。

そして、自分と異なる意見や考え方の人がいたとしても、否定せず、おたがいに相手を理解することができれば、少しずつ争いが減り、平和な世界へと近づいていくはずだ。

近年、若者の戦争への関心が薄れてきている。しかし、これからの未来をつくっていくのは私たちだ。平和や戦争のことを知り、全員が関心を持って行動していきたい。未来を担う私たち若者が、希望の輪を広げ、明るい世界を築いていきたいと思う。

## 戦争により 得たものと失ったもの

第二中学校 三年

### 上遠野 つばさ

まず始めになぜ戦争が始まるのか。その一例として資源、領土を奪い国のものとし、国力を増強するため。いわば自国の利益のために戦争は起きています。第一次世界大戦や第二次世界大戦などが勃発した原因にも少なからずこのような要因が含まれています。

また戦争に至らずとも竹島や北方領土を巡る領土問題なども私たちにとって身近な争いとも言えるでしょう。

先程、資源、領土を求め勃発した戦争の例として第一次世界大戦を挙げました。この戦争における戦勝国、主に連合国側のアメリカ、イ

ギリス、フランスなどは多くの領土、資源、それ以外にも経済的、軍事的優位を獲得するに至り各国は膨大な利益を生み出しました。それは日本とて例外ではありません。世界各国が戦時下に置かれることにより軍需品、日用品などの需要が急激に上昇。その結果として需要が高まる製品を大戦の主要国に多く輸出、また、海運業や造船業を中心として事業を展開していくことで日本は大戦によって多大な利益を上げていきました。

しかしこのように数多なる輝かしい功績を生み出す反面、戦争は余りにもリスクが高すぎると言わざるを得ないでしょう。

大戦に身を投じてきた国々に共通して存在するリスクは数多くあります。その中でも特筆すべき事象は大戦の影響で各国は莫大な犠牲者を生んでしまったことだと私は考えます。

第一次世界大戦によって犠牲となった戦死者は軍人、民間人双方を含めておよそ一千万人近くにまでのぼるとされています。また戦傷者数は推定においておよそ二千万人程度までのぼると考えられています。それ以外にも戦争による被害を被り、PTSDと呼ばれる精神疾患を患ってしまう人々も決して少なくはありません。

また戦争により人民に甚大な犠牲をもたらすことは戦後に生きる人々然り、社会全体に然り非常に大きな影響を及ぼします。ではその影響について個々に焦点を当てて考えてみましょう。

戦後に生きる人々に対する影響は幾多にもわたります。先程言及したPTSDも人々に大きな影響を及ぼしています。まずPTSDはストレス、トラウマなどが原因となって発症します。

具体的な症例としては睡眠障害、トラウマのフラッシュバックによる動悸、過呼吸や記憶障害など様々にわたります。他にも戦争が原因となって発症した人の中には幻覚、幻聴などにより未だに戦争をしていると思ひこんでしまうなど統合失調症のような症状を患ってしまう人もいます。

このようにPTSDは多種多様な症状が表れ、今尚多くの人々を苦しめる根源の一つとなっています。

またPTSDのような精神的な病以外にも戦争により体の一部を欠損してしまい今まで簡単にできていたことすらままならない状態に陥ってしまう人もいます。

さらに、震災孤児、家屋を失い路頭に迷う人、衛生環境の悪化に伴う疫病の蔓延。このように戦争は直接的でなくとも戦後に生きる人々に対してあまりにも多大な被害をもたらしています。

これは社会全体に対しても同じように言えます。精神、身体障害により仕事のままならない人達、軍人として動員、徴兵される人達による働き手の不足。戦争により崩壊した建物の中には歴史的価値のある建設物も含まれていたことでしょう。

他にも敵国との対立や亀裂による差別意識。これは私たちにとって身近です。例えば中国などとは過去に戦争を幾度もしていたり、国民性の違いなどによる不和であったり長期間日本とは対立している状況に陥っていました。これにより私たち日本国民、或いは中国国民は互いが互いに対してよからぬ感情を抱き日中関係悪化の一途を辿ってしまう危険性もあります。

このように戦争は政治的、文化的、その他諸々、社会全体に悪影響を与えていると考えることができます。

これらを総括すると戦争は国に目覚ましい利益を与える反面大きな損害をもたらしているといえるでしょう。

だからこそ私は考えます。たとえ戦争に勝つことで国が潤うとしても戦争を正当化してはならないと。

国が利益をあげたいがために一体どれほどの命が失われたのか。また、どれほどの人々が苦しみ、終戦した今でもその苦しみと戦っているのかを。

そのことを忘れずに二度と同じ過ちを繰り返さないようにするべきだと。

そう私は考えます。

## 平和な社会の実現に向けて

第三中学校 三年

目黒結衣

平和や戦争。私はそれらについて目を背けるようになってきました。なぜなら、悲惨な様子を知るのがとても怖かったからです。授業である程度学ぶことはあっても、自ら知ろうとは到底思うことができませんでした。けれど、そんな私でも興味を持てるきっかけが訪れました。



それは、『朗読劇READING WORLDユネスコ世界記憶遺産舞鶴への生還「約束の果て」』という朗読劇を大好きなアーティストさんが行うというお知らせでした。もちろん応募し、その作品を鑑賞するにあたって最低限の知識を得ようと思い、物語のキーポイントである「シベリア抑留」と「京都府舞鶴市引揚記念館」について調べてみることにしました。

まずシベリア抑留とは何か。ソ連軍に投降した多くの日本兵や一部の民間人が、シベリアをはじめとするソ連領地内に、「日本に返してやる」とソ連軍に言われて連れてこられたそうです。なんて酷いのだろうと思います。その数およそ六十万人と言われ、意に反する強制収容所での生活を余儀なくされたそうです。抑留中は十分な食料もなく、飢え死にしていくな、寒さで亡くなっていく人、赤痢やコレラなどの伝染病が発症し亡くなる人など多くの犠牲者が出ました。次に舞鶴引揚記念館について調べました。日本がポツダム宣言を受諾した後GHQとアメリカ軍の方針のもと、海外にいる日本人の一斉引揚を決定しました。その引揚港に指定されたのが舞鶴港でした。昭和二十年九月に引揚港に指定されてから、昭和三十三年九月までの十三年間で延べ三百四十六隻の引揚船が入港し総数六十六万二千九百八十二人が舞鶴港に上陸したそうです。そんなシベリア抑留から脱出した人々を引き上げたことを記念してこの舞鶴引揚記念館は建てられました。このシベリア抑留の話を調べたとき、とても辛い気持ちになりました。収容所というのはユダヤ人を収容したアウシュビッツ収容所しか知らなかったもので、日本人もひどい環境で収容されていたことを初めて知り、

とても驚きました。そしてそのような人たちを大量に救った舞鶴港にも感動しました。とても重要な役割を果たしたのだと思いました。八月には広島、長崎の原爆の日、終戦記念日もあります。シベリア抑留の話から興味をもち、八月六日の平和記念式典を見えることにしました。

来年で八十年が経つ七十九回目の原爆の日。被爆者の方や遺族の方々が年々重ねていたり、メディアで取り上げられなくなったり、この日のことすら知らない人もいると考えると、日本人の多くの人が忘れていっていると感じます。私は今、この世の中で平和を実現することは難しいと思います。なぜなら昔より多様性を重視し、様々な考えが認められている分、対立が増えると思うからです。でもそんな世の中で他人の考えを否定から入るのではなく、相手との共通点や相違点を見つけ、お互いを尊重し合いながら理性的に話し合うことが必要だと思います。また、一番平和に近づくためには世界中の人が戦争を知り、平和の大切さについて学ぶ必要があると思います。私は好きなアーティストを経由して戦争について調べたけれど、どんな形であつても平和や戦争に興味を持つことが大切だと思いました。ネットや色々なものが普及した今だからこそ一番考えるべきだし、今もウクライナの戦争、イスラエルの戦争などたくさんさんの地域で戦争が起こっていて、もう日本も他人事ではないと思います。

終戦から約八十年が経つ今を生きる私たちができることは何なのか。全ては知ることから始まります。誰もが平和について当たり前に考えることのできる社会になってほしいと心から思います。

# 生きている限り

第五中学校 三年

伊 賀 悠希美

一九四五年八月九日皆さんはこの日何があったかご存じだろうか。午前十一時二分、突如光に照らされ、空には巨大なきのこ雲。その巨大なきのこ雲の下で何がおこったのか、この先に何が待ちうけていたのか。忘れてはならない、伝えていくべきである長崎原爆投下。

私はこの夏、長崎原爆資料館へ行った。今から七十九年前という昔の出来事：のはずが、溶けたびん・衣服・手までもがこれでもかというほど残っていた。それはまるで、タイムリープしたかのようだった。見ていて気分の良いものではなく、ただひたすら辛いだけだった。

原爆によって亡くなった人は不幸で地獄だったと思う。だがそれよりも被爆者であり、かろうじて生き残った人は、明日の生活も生きゆかず、絶望的な状況で（明日どう生き延びるか）毎日毎日考えて生きて日々が地獄そのものだと感じた。その時代を生き延びることができたこと、果たしてそれが幸せだったのかは分からない。

その地獄生活を皆さんに少しだけ紹介しようと思う。自宅はなくなり再建するために、必死になって焼け残った丸太や瓦を拾い集めたが、雨風を凌ぐことはできない。お金も働く場もない。配給される物資だけでは生きて行けず、カビの生えた穀物の食べることのできる部分を

探し、生き延びようとする。顔はかぼちゃのように膨れ上がり、皮膚は垂れ下がるという最悪の状態。喉が渇き水を探し回ってもあるのは、油の浮いた水だけ。どうしてもどうしても水が飲みたくて油が浮いた水を飲み、ある人は川の水を飲んだ。間もなくして、放射物質の含んだ水を飲んだ人は、皆息絶えた。周りを見ても建物は跡形もなく消え、どこを歩いても人。時には踏んで歩かなければならない。このように、まさに地獄を生きた人が大勢いる。

生活を取り戻しても被爆者の地獄は終わることはなかった。家族・友人を失った悲しみ、心と体の病、社会からの眼差しは厳しく、生活の節目節目に悩み、苦しめられた。地獄は終わることを知らない。被爆者に一生襲いかかる。

私は、被爆者である林田エイコさんの言葉を目にしたとき、強く感銘を受けた。「私の人生は苦しみと痛みの闇しかなかった。至福もない。生きていることが地獄。死んでいればと何度も思った。過去の苦しみ、痛み、心の穴埋めは薬では治すことのできない。一生背負う遺産だ。」様々な苦難に直面しながらも、自分たちの『生きた証』を後世に残そうと命懸けで戦った人がいたことを忘れてはいけない。私達は、日々生きていく生活の『あたり前』に、ありがたみを感じ過ぎるべきだろう。

核兵器は残虐で人道に反する兵器だ。廃絶すべきものだ。核兵器の脅威が高まる今だからこそ、原爆が人々に何をもたらしたのか知ってもらいたい。戦争で亡くなった人や、遺族の意志を引き継ぎ、戦争のない・核兵器のない世界の実現のために行動している人がいる。

この出来事は決して忘れてはいけない、伝え繋<sup>つな</sup>がなければいけない。戦争のない・核兵器のない世界になる頃には私はきっと生きていないだろう。もしかしたらそんな夢みたいな世界にはならないかもしれない。それでも、私はこの一連を知ったこの日から死ぬまで生きている限り、原爆被害を伝え続けようと決めた。

## 不戦を誓う

第五中学校 三年

松 金 郁 玖

雲の上から聞こえた爆音  
銀色に光る小さな機影  
ピカリといきなり光る  
真夏日の太陽の明るさは比でない  
一瞬でありとあらゆるものを  
押し倒し  
粉碎し  
吹き飛ばし  
一面、焦土と化す  
不意に生活、家族、将来を失い  
人々を極限状態に置く

奪われた命の尊厳

『はだしのゲン』の描写そのものだ

日本人の戦意にとどめを刺した原子爆弾

その名はリトル・ボーイ

塗炭の苦しみが今もお統いている

「戦争を早く終わらせた」

あの国は言っている

戦果は何をもたらしたのか

原子力、善用すれば

人類文明の進歩もあるが

悪用すれば

地球を破滅せしめる

そんな存滅の鍵の所持は

果たして必要か

被爆国日本にできること

惨禍を風化させぬ

戦争遺産を受け継ぐ

不戦を誓って

今夏も戦死した先祖の墓碑に合掌

# ひかり、燃えたあの日と今

第五中学校 三年

久保田 章 斗

宙を翻る鉛筆

まるで風を切る鳶とんぼ

燦然さんぜんとして煌めいた明かり

音が消え

視界が歪み

陽炎が爆ぜる

刹那、轟音に満ちる

焼け爛なだれたのはこの世界か

それとも私か

燃え果てるべきなのはこのくにか

それとも

灼熱しゃくねつの中で

生を求め

明日を求め

水を求め

あなたを求め

嘘ではない

今、私たちが生きている理由

紡がれた命は奇跡の産物

語り継ぐ歴史は

私たちの責任

過ちが繰り返されないよう

誰も悲しまないよう

何年先、何十年先、何百年先

一人として忘れてはいけない

あの日、誰かが望んだ今日に

私たちは立っている

あの日、誰かが願った明日に

私たちは向かっていく

この大地と空に生を全うする

それ以上になにがいるのか

平和、その途方もない道中に

私たちが生きているのだ

# 平和への第一歩

金岡中学校 二年

伊藤紫野

七月の中旬頃、私はある一冊の小説を読みました。現代の女子高校生が、あることをきっかけに戦争の時代にタイムリープし、そこで出会った特攻隊員に恋をするという物語でした。私はその小説をきっかけに、戦争について興味をもつようになりました。

また、その時期に原爆についてのテレビ番組が多く放送されていたということもあり、特に原爆について詳しく調べてみたいと思いました。

そして、父に頼んで、広島の平和記念資料館へ連れて行ってもらうことができました。

そこには、受け入れ難くなるほど無惨な光景が広がっていました。全身に火傷を負った人の写真や、飛び出て垂れ下がった目玉を手で受け止める人のイラスト、被爆した子どもたちが当時身につけていた衣服などが、たくさん展示されていました。

それらを目の当たりにしてすぐに私は、何も言葉を発することができませんでした。代わりに、言葉にならない悲しさや悔しさが込み上げてきて、資料館を出た後も気分は暗く沈んだままでした。

私はこの経験を通じて、自分がどれだけ平和で、幸せに生きること

ができていいのか、改めて感じました。

今までは、毎日のように親に叱られたり、ちょっとしたこと友達とすれ違ってしまったりする自分のことを、平和に生きていて特別幸せな人間だと思ったことはあまりありませんでした。

けれど、疎開先で被爆し、家族に会えないまま亡くなった子どもの話を知り、親に叱ってもらえるだけで自分がどれだけ恵まれているのか分かりました。また、友達が原爆で亡くなってしまった少年の話を知り、友達と毎日話して意見を交わし合うことが出来ている自分ほどれだけ幸運なのかも分かりました。

改めて私は、今この瞬間もたくさんさんの国や地域で起こっている戦争は、本当に馬鹿げていて愚かなものだと思います。

国の平和を守るために、国民全員から平和を奪ってしまったら、元も子もありません。

もちろん、人々の考えや価値観がそれぞれ違うのは当たり前です。だから、自分たちのことを守るため、それぞれが対立してしまうこともあります。しかし当然、戦争をしたら自分たちが守られるというわけではありません。戦争をしたら、その分だけ自分たちの平和が脅かされ、その分だけつらく悲しい思いをすることになります。

私は、難しくても、戦争をこの世からなくすることができると思います。なぜなら、日本が戦後から一度も戦争をしていないからです。

日本は世界でも唯一の被爆国です。だからこそ私たちは、戦争の恐ろしさや残酷さを誰よりも理解し、それをこれから生まれてくる子どもたちや、外国の人たちなどに伝えることができると私は考えます。



そうすることでいつかこの世から戦争をなくすことができると私は信じています。

これから日本や世界で戦争が起こらないようにするための第一歩は、一人ひとりが戦争について知ることです。そして、対立があったとしても、戦争とは別の平和な解決策を見つけていくことがとても大切なことだと思います。

## 私が感じる平和

金岡中学校 二年

平野凜子

私が感じる平和…それは、戦争や核兵器のない安全な世界のことだと思います。戦争や核兵器というものは、人の命を一瞬で奪ったり、生きることができたとしても身体の一部がなくなったり、火傷で皮膚がただれたり、被爆したことで障害が残ったりと、失うものばかりで何一つ得られるものはありません。

私は平成に生まれ、食べ物や飲み物、あらゆるものにあふれる時代に生まれ、何も不自由なく生活しています。私が誕生する時は母のそばで父が立ち会うことができ、生まれてからは、祖父母や親せき、友達と多くの人達が私の誕生を祝ってくれました。当たり前前の幸せがそこにはありました。

私は、ニュースで、戦争をしている場所で小さな子どもが血を流して苦しそうにし病院へ運ばれる姿を見ました。また、数時間前に我が子の誕生を喜んだのも束の間、襲撃され、生まれて幸せだった赤ちゃんが天国へ旅立つという悲しい映像も目にしました。どちらも、我が子が亡くなってしまった姿を見た親が大泣きをしながらインタビュを受けていて、胸がしめ付けられました。なぜ、何も悪い事をしていない幼い子どもが巻き込まれなくてはならないのでしょうか。どうして、一瞬で人生を終えなくてはならないのでしょうか。怒りが込み上げてきました。

私は小説や映画でも戦争の物語を見ました。戦争や核兵器が落とされるということは地獄であるということが伝わってきました。物語には、国のため、国民のためにと自らが志願し、爆弾を積んだ戦闘機で敵の船に体当たりをし、沈没させる任務を遂行する特攻隊が登場しました。ただ特攻隊の運命は「死」を意味するのです。しかし、国民にとっては「神様」という存在でもありました。

特攻隊員の中には、結婚を予定している人、赤ちゃんが生まれ家族が増える人、勉強しながら夢を追いかける人、ほとんどが若者だったようです。特攻隊は、急に出撃命令が出され、飛び立たなければならぬのです。大切な家族や友達とのかけがえのない時間を断たなければならぬのです。「自ら国民のために命を犠牲にする」ということを特攻隊の人々は理解していたようですが、中には逃げ出した人もいたようです。現代を生きる私達にとつたら、逃げ出したいと感じるのは当たり前のことだと思いますが、当時の国民はそ

のように発言できる世の中ではなかったのです。特攻隊の方はもちろんのこと、周囲の方の気持ちを考えたら、とても辛すぎて言葉に表すことが難しいと感じました。

「戦争」という言葉はたった二文字で読めますが、戦争というのはこんなかんたんな文字だけでは表せないほどの痛さや苦しき、悲しき、など様々な感情、辛さ、重みがある言葉であると強く思いました。

私達は、普段何気なく生活をしていることは当たり前と思っていますが、それは当たり前ではなくて、とてつもなく幸せなことであることをかみしめなくてはならないと感じました。また、幸せな時代に生きている私達は、戦争や核兵器のおそろしさを今生きている人達に伝える必要があると思うし、毎日普通に生活できていることに感謝しながら今一緒に居られる友達や家族を大切にしなければならぬと強く感じました。今まで何も考えずに食べ物の好き嫌いを残していたことを反省して、これからはしっかり幸せを感じながら食事の時間を大切に完食したいと思いました。

## 戦争と政治

大岡中学校 一年

秋 山 勇 寿

なぜ世界から戦争は無くならないのだろう。ニュースなどを見るとふとそう思う。

昔から戦争や内戦は無くなったことが無い。今もウクライナとロシア、イスラエルとハマスがむなしだけの争いをしている。戦争をして何になるのか。戦争をする国もそうだが、他の国もそうだ。ニュースに出して現状を伝えるだけで、止めようとしたりしない。ましてや、片方の国の応援をして、争いをエスカレートさせていく。日本もだ。ウクライナに軍事兵器を送り、止めさせようとはしない。そういう国は、きつと立場が逆になり、自分が争いをする側になっても止められないのだろう。

争いが完全に間違っているとは言わない。スポーツや音楽などの大会はより上を目指すため、そして努力の結晶を見てもらい、認めてもらうためなどにある。国際的な大会ではオリンピックなどもある。このような争いはあるべきだと思う。しかし戦争は別だ。スポーツから出てくるもの、それは美しい汗、戦いを通しての友情、感動の涙など。だが、戦争から出てくるものは、血と悲しみの涙だけだ。スポーツには順位がつく。上を目指すためには欠かせないことだと思う。戦争に

も順位がある。軍事力ランキングと言い、二〇二四年のこのランキングでは日本は七位と高い軍事力指数を持ち、前年度より高い順位となった。一見、喜ばしいことに感じるだろうが、少しおかしいとは思わないだろうか。日本は第二次世界大戦への反省から、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにするという決意を日本国憲法として記した。日本国憲法の三原則の内、「平和主義」では、戦争と、武力による威嚇または武力の行使は、永久に放棄することを誓い、その目的を達するため、戦力を持たず、交戦権を認めないとされている。では、なぜ戦力を持たない国が高い軍事力を持っているのだろうか。矛盾しているとは思わないか。いざという時のために兵力を持つことも大事だ。国を守るために、自衛隊のような軍隊も必要である。では戦闘機を作るのも防衛なのか。今、日本はイギリス・イタリアと戦闘機を共同開発している。これは個人的に、武力による威嚇、武力の行使にあたりと考えている。共同開発により、三国の国交を強調し、新兵器の製作により、周りの国に簡単に攻めさせないような圧を出している。日本国憲法は何のために作られたのか、考え直してもらいたいものだ。

ここまで散々否定的な意見を述べてきたが、かといって自分はどうすることもできない。今、戦争している国を和解させることもできないし、政府などの機関に考えを話すこともできない。大切なのは、一人一人が意見と危機感を持つことだ。ロシアとウクライナの戦争も、最初は毎日のように報道をされていたのに、今では極端に少なくなっってしまった。当たり前になってしまっているのだ。戦争が当たり前にな

なるなど、言語道断。あつてはならないことだ。一人一人が危機感を持っていないからこうなった。選挙での投票が少なくなっているのも、一つは意見を持たない人がいるからだと思う。それが戦争に繋がってくる。

戦争を完全に無くすのは難しいと言える。だが、一人一人が身近な所から関心を持ち、大切だと思う価値観を作ること、少しでも戦争を減らすことができるかと考えている。

## 戦争のない今の日本

大岡中学校 二年

宮澤 弥花

戦争とは何か、平和とは何か、普段の生活の中で考えることはない。今回の夏休み、私は母の実家に家族で帰省した。母の実家の仏壇には、曾祖父の写真が飾ってある。至って普通の優しいおじいさんとおばあさんである。母の実家からさらに山奥へ行ったところに、曾祖父が暮らしていた家がある。そこで、『戦友』というタイトルの辞書のように分厚い本を見つけた。母が興味深げにその本を開くと、軍服を着た若い人たちの顔写真や今の年を重ねた顔写真、階級や所属の軍隊、家族構成などが書かれていた。その中に曾祖父の若い頃の軍服を着た写真が載っていた。仏壇の写真のおだやかで優しいような雰囲気と

は違い、若くて真面目そうな雰囲気だった。私は、曾祖父のことは仏壇の写真でしか見たことがなく、仏壇の写真とイメージが違ったため驚いた。また、記載されていた階級が生々しく感じた。こういった表現は、戦争のドラマや映画でしか聞いたことがなかったからだ。自分の身内が実際に軍隊に所属し、戦地で戦っていたことに衝撃を受けた。もし、曾祖父が生きて帰ってきていなかったら、今の私は存在しない。夏休みのこのできごとをきっかけに、戦争について知りたいと感じ、母が見ていた映画を見てもみることにした。

母が見ていた映画は、現代の高校生が第二次世界大戦の最中の日本で特攻隊員の人たちと関わる映画である。特攻隊員の人たちと関わっていく中で、数人が戦地に行くことになり、主人公はショックを受けていた。まだやりたいことや夢がたくさんあるのに、なぜ自ら戦いに行くのが主人公には分からなかった。私も主人公と同じように疑問に思った。主人公は現代の日本で進路に迷い、母親にも素直になれずもがいていたが、戦時中の日々を過ごし、一日を大切に生き抜いていくことの素晴らしさ、母親の大切さ、いかに自分や今の日本が平和で恵まれていたのかを感じ取り、人として成長していった。特攻隊員は、死を免れない運命である。自分の命を犠牲にすることが前提で敵国のもとに突撃していくなんて、今の社会では到底理解できないことだ。それを受け入れ、自ら志願する人たちが大勢いたことも信じられない。この感情は今を生きる私たちにとってはごく自然な感情である。しかし当時の日本では映画の中でも「非国民」と非難されていた。これは当時の国の方針に基づいた教育システムや軍国主義による影響である。

今の日本は民主主義であり、このような考えは存在しない。第二次世界大戦により変遷を遂げたため、まだ解決していない問題や重大な問題はありますが、第二次世界大戦の頃と比べると、とても平和になったといえる。映画の中のように爆撃機による攻撃も、戦火の中逃げることもない。主人公が戦時中の日本を過ごすことで、現在がいかに平和であるか、自分がいかに恵まれていたのか気づいたように、私もまた、戦争について触れたことで、現在の日本が、自分の置かれている環境がどれほど恵まれているのか気づくことができた。第二次世界大戦で失われたものは多すぎる。犠牲になった人たちの命は戻ることはない。しかし、曾祖父のように懸命に戦った人々やたくさんの人々の一生懸命な想いがあったからこそ今の平和な日本が存在するという部分もあると思った。私にとって遠い戦争のことを今回の夏休み、曾祖父の家で見つけた本をきっかけに、ほんの少しだけ近くに感じ、考えることができた。たくさんの人々の想いの上、たくさん尊い命の上に今の平和があることを忘れてはならない。

# 平和を伝える

大岡中学校 二年

## 河田真優

私は普段から家とっている新聞の気になる記事を読んでいます。八月に入ってから原爆を落とされた日に向けて戦争の当時のことをテレビで放送されている中、とある記事を目にしました。それは被爆者の平均年齢のことや原爆についての記事でした。

私は、原爆や戦争のことはニュースで見たり、学校で戦争に関係のあるものを読んだりするだけでよく知らなかったので、平和を考える良い機会になりました。

今、日本の被爆者平均年齢は、八十五・五八歳と高齢化が進んで体験を語れる人が減ってきています。また、被爆者であることを証明する「被爆者健康手帳」を持つ人の人数が、今年の三月時点で十万六千八百二十五人と減っていることを知りました。

他にも、全国には被爆者たちの団体があり体験したことを語っていますが、高齢化によって解散や活動休止になることも増えているという現状になっていくことがわかりました。被爆者人数は二十四年前の二〇〇〇年の二十九万八千二百二十四人と今より約十九万人多かったです。

私は、昨年の合唱コンクールで『HEIWAの鐘』を歌いました。

歌詞から、先人たちの平和への思いや生き方を伝えたいということや戦争のことを語り継ぎたいという思いが込められていると思いつながら歌いました。この曲により、戦争や原爆のことを想像し、また同じことが繰り返されてはいけなく強く思いました。

原爆は、一九四五年八月六日に広島市に、三日後の九日に長崎市に投下され、そのときにすさまじい暴風や熱線により、爆心地から半径二キロメートルまでの建物の多くが焼けてなくなりました。このことでした。また一九四五年の末までには、広島で約十四万人、長崎で約七万人が亡くなり、原爆が放出した放射線が人体の奥深くまで入り込んで細胞を破壊し、内臓などにも様々な影響を与えました。

昨年、広島に行き、原爆ドームを見ました。原爆によって壊れ、焦げた建物が未だに残っていたのを見て、衝撃を受けました。近くの広島城は当時現存していた城だったが、原爆により倒壊してしまったことでした。原爆投下直後を撮影した写真を何度も見たことがあったけれど、実際に見ることにより悲惨な状態であったと実感し、当時のことを考えて悲しくなりました。原爆についてもっと知ることができた今では、建物から当時の様子がわかるくらい迫力があり、形となって残っているからこそ、未来に伝えるために大切な建物なんだなと感じました。

私は、平和な時代になってから生まれたので、戦争がどういったものなのか知りません。戦争がどうだったのか、そのときの状況はどうだったのか、考えて想像することしかできません。しかし、戦争を経験した人たちが減ってきてしまった今だからこそ、戦争のことをもっ



と知って、戦争やそれによる意味のない犠牲者がいない平和な世界を作っていききたいと思います。さらに、平和な生活が当たり前と思うのではなく、原爆を落とされたことや戦争をしていたという事実を絶対に忘れずに、このことを伝えながら、平和を願っていききたいと思います。

## 地球の上で

大岡中学校 三年

原田 萌衣

鳥のさえずり  
うるさく響く蝉の声  
笑い合う声 怒鳴る声  
全てに通じる一つの命

あの時の夏も 変わらない  
青くて丸い地球の上で  
赤くて黒い世界が広がる

地球上にたった一つの尊い命  
次から次に消えてゆく

一つの命が一つの命を 一つの人生を  
消してゆく

誰が願い 誰のために 死んでゆくのか  
人の死を願うことがあって良いのか

誰も笑えず 涙をこぼす  
悲しみに暮れ 目をつむる

今も変わらぬ 青い地球  
白く浮かぶ雲の上

緑に輝く草木と共に  
広い大地を踏みしめる

青い地球と生きる命  
青い地球と生きた命  
あなたは今 幸せですか？

光輝く私の命  
光輝くあなたの命  
今生まれた新たな命  
今に消えゆく一つの命  
全てに通じる尊い命

青く丸い地球の上

赤く黒く染めないために

私たちにできること

青く丸い地球の上で

尊い命をどう使う？

今日も明日もその先も

青い地球でみんなと笑い 手を繋ぎ

嘯み締めながら 今を生きたい

## 「あの時」を忘れない

大平中学校 二年

### 大村 柊 登

今年僕の曾祖父が九十九歳で亡くなった。最後まで笑顔で穏やかな性格だった曾祖父との思い出を振り返りながら顔を見ていると以前話した会話を思い出した。亡くなった曾祖父の額にある血腫を幼かった僕は「梅干しみたい。」と言ったことがある。その時曾祖父は笑いながらその血腫ができた理由を話してくれた。

体が小さかった曾祖父は徴兵検査を乙種合格となり戦地へは行かずに小学校教諭となった。戦争中は授業でも軍歌を歌ったり、小学生も消火訓練をしたりするなどして戦争色の濃い授業を行っていたそうだ。

夜になると敵機に見つかるという理由で街灯は消され、自転車のライトさえつけられなかった。暗い道を家に向かって自転車で走っていた曾祖父は誤って川に落ちてしまい頭を切ってしまった。なかなか帰らない息子を心配した曾祖父の母親が探しに行ったがライトもなかった当時、川に落ちていた姿を見つけるまでにはかなりの時間がかかったそうだ。病院もなく、医者を呼ぶまでもかなりの時間がかかり、血が止まらず一時はどうなることかと思ったそうだが、命は助かった。その時にできた傷が七十五年以上消えていないのだ。その話を聞いた時はまだ幼かったので、戦争についてあまり知らなかったし興味もなかったのであまり思い出すこともなかった。

僕が戦争に興味を持ったのは『永遠の0』<sup>ゼロ</sup>という映画を見たからだ。飛行機のエンジン音やスピード感がカッコよくて何回か繰り返し見ていくうちに戦争に興味をもった。すると、母から曾祖母が戦争中に満州から引き上げて来たから話を聞いてみるように勧められた。曾祖母の話は衝撃的で僕には全く想像できない作り話のように感じた。曾祖母はいつも通りの表情で話していたが、その声の中には色々な感情が詰まっているように感じた。そんな曾祖母も曾祖父が亡くなってから元気がなくなり、今回曾祖父の額の血腫の話を知ったことが、

「そんなこともあったねえ。思い出すと悲しくなるから話したくない。」と話をすることをためらった。僕の母は子どもの頃よく祖父母から戦争の話聞き、毎年八月十五日には黙祷をしていたそうだ。

今年で戦後七十九年になる。日本では僕の祖父母が生まれるずっと前に終わった。今、八月十五日が何の日なのか知らない人も多いと聞

く。僕はたまたま曾祖父が長生きをしてくれたので昔の話を聞くことができたが、教科書には書いてないことばかりだった。曾祖父の経験した戦争と曾祖母の経験した戦争は同じ話ではなかった。きっとあの時代を経験した人たちにはそれぞれの経験があるのだろう。沖繩や広島ではそういった経験を語り継いでいる人の高齢化が進み、語り継ぐことが難しくなっているようだ。この前高校生が戦争経験者の方々の話を語り継ぐために活動しているニュースを見た。僕と年齢が近い人達が戦争を知らない人に戦争の話をしているのを見て

(こういう人も居るのか。すごいな。)

と思った。色々な戦争を知ることと自分と重ね合わせたり、衝撃を受けたりしてより戦争の悲惨さ、繰り返しはいけないと言われている理由を知ることができると考える。戦争をしていた時代からあつという間に百年が経つだろう。人見知りの僕には人前でもなにかを話すことはハードルが高いが、こういう思いを持っていれば機会があった時に誰かに何かを伝えられるかもしれない。だから曾祖父や曾祖母から聞いた話をいつまでも覚えていようと思う。

## 平和ってがんばらなきゃ いけないの？

大平中学校 二年

大川 天音

私は毎年八月六日と八月九日に、近くのお寺に祖父母と共に鐘をつきに行っている。初めて行ったのは三才位だっただろうか。お寺に鐘つきに行く？といった具合の軽い誘いだっただけだと思う。興味にひかれるままについて行くとそこには大人しかおらず、子どもは私一人だった。めずらしがられてずいぶんかわいがられた記憶がある。どうして私の他に子どもがいらないのだろうという疑問はあったが大人の中に子どもが一人だけという状況は思いのほか嫌ではなく、なんとなく毎年参加するようになった。それが広島と長崎に原爆が落とされた日の慰霊の行事である事は小学校に上がる頃には理解していた。

中学生となった今では構われることもなくなったが相変わらず子どもは私一人だけだ。私も私でまるで子ども代表かのような顔をして大人達と慰霊の鐘を聞く。この時ばかりは平和を願う無垢な子どもを演じているが、私は普段の生活で広島や長崎に思いを馳せる事も、戦争や平和について考える事もないのだ。ロシアのウクライナ侵攻や、イスラエルのガザ地区への攻撃も新聞やネットニュースで知ってはいるが今一つピンとこない。どこか遠い所の話で私にはまったく関係も影

響もない出来事だと思っっている。にも関わらず新聞やニュースでは戦争の事を大々的に報じるし、学校では戦争はしてはいけない事だと教わり、祖父母は二度と戦争をしてはいけないと言う。毎年八月六日や九日や十五日は慰霊祭や追悼式が行われ、なんだか大人達が平和である事、戦争をしない事をがんばっているように見える。平和ってがんばらなければいけないの？がんばらないと戦争がおきるの？

そもそもどの国にも殺人を禁じる法律はあるはずなのに、こと戦争になれば他国の人間は殺して構わないのか？ どうにも理解できない。個人による殺人はダメで国による殺人なら良いなんて事はあっていいはずがない。戦争も器物損壊罪であり不法侵入罪であり暴行殺人罪なのだ。警察が捜査して首謀者と実行犯を捕まえて罰を与えればいいのか。ウクライナ侵攻の首謀者はプーチンだ。なぜすぐに逮捕しないのか。わからない事だらけだ。ウクライナもそうなのだろうが特にガザ地区では多くの一般市民が犠牲になっているという。もし日本の街中で通り魔が刃物を持って通行人に切りつけたらおそらくあつというまに多数の警官によってたかたか押さえつけられ逮捕されるだろう。なぜ世界はよってたかってロシアとイスラエルを押さえつけないのだろうか。子どもには暴力は絶対にだめだと教えながら世界は暴力を見逃している。

この事態を誰がどう説明してくれるのか。モヤモヤしていても仕方ないので戦争に関する世界共通のルールを調べてみた。あった。国連憲章の「武力不行使原則」というらしい。よかった。戦争はちゃんと世界で禁止されている。違反した国には国連加盟国が集団で軍事的措

置を含む必要な措置をとる。とある。なんだ、よってたかって通り魔を押さえつけるシステムはあるじゃないか。ではなぜロシアとイスラエルはまだ押さえつけられていないのか。武力不行使原則の説明の続きにこうあった。それには国連の安全保障理事会の常任理事国である中国、フランス、ロシア、イギリス、アメリカの同意が必要で、一ヶ国でも反対すれば決定はなされない。なんと、つまり常任理事国が起こした戦争は集団で軍事的措置をもって取り締まれないという事か。なるほど、通り魔が警官の身内、もしくはお友達だったら全警官がその犯行を黙認するという訳だ。

中学生でも感じる憤りを大人達が感じていないはずはない。こんな不完全な国際法では安心できる訳がない。私の生活している世の中が急に不安定なものに見えてきた。こんな大穴のあいたルールは変えなければならぬと思う。そうか、平和はまだまだががんばらなくてはだめだ。その事を祖父母は知っていたから毎年私を鐘つきに連れだすのだろう。おそらくルールを変えるのは私達の世代なのだから。

# 平和への第一歩

大平中学校 三年

星 谷 好 美

私たちが暮らすこの地球は、時折平和を忘れ、戦争という悲劇に見舞われてきました。一九四五年八月六日と九日、広島と長崎に投下された原子爆弾は、一瞬にして数十万人の命を奪い、街を壊滅させました。生き残った人々も、放射線の影響で長年にわたり苦しみ続けています。その悲惨な光景は、今なお私たちの記憶に深く刻まれていています。核兵器は、人類にとって絶対に使用されるべきでない破壊力を持っています。その存在自体が、私たちの安全を脅かすものなのです。

私はこの作文を書くにあたって「平和」について考え、疑問に思ったことがあります。世界で唯一原子爆弾の被害にあった日本が今では平和な国ランキング上位にいるのです。なぜでしょうか。私は日本の歴史について調べてみました。

第二次世界大戦からの復興は、日本の努力だけで成しえたわけではないということが分かりました。世界銀行からの巨額の融資で新幹線や高速道路、ダムなどの生活の基盤を建設し、ユニセフからの寄付で子供達に救援物資が届けられました。その根底には様々な国の協力がありました。国際社会の中でお互いの違いを尊重しつつ共通の目標に向かって協力することが重要です。貿易、環境保護、人道援助などの

分野で協力し、対話と交渉を通じて紛争を平和的に解決すること。各国が互いに助け合いながら平和で繁栄した世界を築ければ平和は創れるのです。国という枠組みを越えた国際協力が望まれると思いました。

日本は過去に非常任理事国として何度も選出され、その度に平和の実現に向けた役割を果たしてきました。国際連合の安全保障理事会は、国際平和と安全を維持するために設立されました。世界の平和と安全のために、国際連合の舞台で貢献する大きなチャンスです。非常任理事国として、私たちは核兵器廃絶のために国際社会と協力し、対話と交渉を通じて問題解決に努める必要があります。核兵器廃絶に向けた取り組みは、今もなお世界中で続けられています。多くの外交努力によって非常任理事国が可決したことに対し、常任理事国が拒否権を発動することもありません。しかし、だからといって諦めず、戦争や紛争のない世界を実現するために、できることを粘り続けてほしいです。

二〇二二年、核保有国であるロシアがウクライナに侵攻するなど、核兵器を取り巻く世界情勢は変化し続けています。今すぐに世界中から核兵器をなくすことが難しいことは、中学生の私にも分かっています。それでも国際社会の一員である私たち一人ひとりが過去や他者から学ぶ姿勢を持ち、自分たちの経験や平和への思いを発信し続けることで、核兵器のない世界に一步ずつ近づけると信じています。

私たちが目指すべきは、核兵器のない、戦争のない平和な世界です。その実現のためには、国際協力が不可欠です。広島と長崎の悲劇を二度と繰り返さないために、私たちは核兵器廃絶に向けた努力を続ける



べきです。また、教育を通じて次世代に平和の重要性を伝えることも大切です。過去の出来事や被爆者の話を聞き、知ること。その共感を深めることが平和な世界を創っていくことに最も繋がると思っています。私たち一人ひとりが平和のためにできることを考え、実践することが、戦争のない未来への第一歩です。世界で唯一原子爆弾の被害にあった国だからこそ、敗戦から経済復興をとげた国だからこそ、私たちにできることがあるはずです。

## 『はだしのゲン』から 学んだこと

長井崎小中一貫学校 八年

大川 遼 真

今年の夏休みに沼津市民文化センターに『はだしのゲン』の映画を見に行きました。その中に印象に残る場面がありました。それはゲンのお父さんが竹槍の訓練のときに戦争について反対した場面です。町内の人たちから非国民と非難され、さらには警察から思想を変えるように拷問を受けましたが、お父さんは最後まで意見を変えませんでした。

令和に生きる私たちは、「平和」という言葉を簡単に言えますが、世間が戦争で死ぬことを美德とし、賛成しなければ非国民と称される時

代に「戦争は意味ない」と断言ができることは本当によいと思いましたが。

母から聞いた話ですが、私の曾祖母は戦争中、外では天皇陛下のためになら命を落とせると言っていたけれど、弟には「命を大切にしてい絶対に死んではいけない。」と言っていたそうです。命が惜しくない人はいない。その事実が心痛みました。

『はだしのゲン』の第一部の最後でゲンのお母さんが「天皇陛下様なぜあなたは戦争を終わらせる力がありながら戦争を止めることができなかつたのですか」と言っていました。確かになぜたくさんの犠牲が出てから戦争が終わったのか。今後も戦争について調べてみたいと思いました。

今でもウクライナとロシアが戦争をしています。なぜウクライナの人たちは何をしたわけでもないのに国どうしの争いに巻き込まれなければならないのでしょうか。犠牲になるのは、いつだって一般の人たちです。

私は今回、実際の戦争を元に作ったお話を初めて見ました。戦争を経験した人たちから直接話を聞いたこともありません。この先、戦争を起こさないためにはもつと自分たちの世代が戦争についてしっかりと理解して、戦争によってどれだけ多くの人々が飢えや怪我に苦しんだか、考え方を押し付けられ苦しんだのか、戦争はよくないことだとしっかり心に刻み込み、受け継いでいくことが大切だと思いました。

# 本当に怖いことは

長井崎小中一貫学校 九年

## 石 渡 理 心

私は授業で戦争について学ぶまで戦争や平和について何も知らなかった。私は戦争の映画や本に対して恐いという感情を持っていて読むのを避けていたから戦争に対して何も理解していなかったと思う。しかし、授業で戦争について学んでから社会に対する見方が変わった。戦争の動画や本も読むようになり、そこで学ぶたびに自分が社会や戦争に対して何も知らなかったことに気づいた。逆に何も知らないことのほうが恐いと思うようにもなった。そのように学んでいくうちに日本人はどれだけ戦争に対する関心があるのだろうかと考えて調べました。

もし日本が他国に侵略されたら、戦いますか？ というアンケートで二十人中十四人が戦わない、六人が戦うという回答をした。その中には、何もしない、アメリカ軍がなんとかしてくれる、あきらめて服従する、アメリカなら安全かも、逃げる、という意見があった。私は戦争が起きたときに自分が戦えるか分らない。でも、自分たちの先祖や英霊が必死に戦ってくれた日本なのに、安易に服従するという意見には何も納得できないと思った。また、アメリカが守ってくれるかと思っいるが本当にアメリカは有事の際に日本を守ってくれるのだろうか。アメリカが守ってくれるかと思っいるのは、日本とアメ

リカが安全保障条約を結んでいるからだと思うが、アメリカが確実に守ってくれるという保証は存在しない。現にアメリカは世界のリーダー国と諷(うた)いながら、ロシアがウクライナを侵攻したときにアメリカは直接手を出そうとしなかった。日本のためにアメリカが血を流すことをするとは思えない。

調べていくうちに日本人の殆どは戦争に対する関心が薄いと感じた。戦後七十九年。平和を望むことはするのに、戦争に対してちゃんと学ぼうとしない人が増えた。今、戦争は起こっていないが、これから戦争に巻き込まれ日本が戦場になる可能性は十分にあるのに。平和のためにも何も知っていない状況に置かれていることを多くの人に気づいてほしい。

# 平和を願う気持ちと現実

長井崎小中一貫学校 九年

## 渡 邊 郁 真

私がこの作文を書いている八月九日は、長崎県に原爆が投下された日です。私の母は長崎県出身であり、母が小学生だったときには八月九日は平和集会のため登校日に指定されていたと教えてくれました。その日の学校に行くと、体育館の壁いっぱい当時の写真が掲示されていたそうです。小学生にはとても衝撃的な写真ばかりでした。キノ

コ雲、焼け野原になった街、焼け焦げた人の遺体の山、そして十一時二分に止まった時計。母は、このとき見た写真を今でも鮮明に覚えているそうです。集会では、一学期中に全校生徒で折った千羽鶴を飾ったり、平和を願う歌を歌ったりします。そして、原爆投下時刻の十一時二分になると全校生徒で黙とうを捧げます。母は今でも八月九日の十一時二分になると黙とうをします。

広島や長崎ではこの悲劇を後世に伝えるために、毎年平和祈念式典が開かれます。私たちは式典の様子をテレビで見たり、ニュースで聞いたりして戦争の恐ろしさを知ることができます。しかし、当時を知る人はだんだん少なくなり、伝わりづらくなってきていると私は思います。ただ単純に戦争がなくなればいいね、平和な世界になるといいね、と思うのは簡単ですが、実際の当時の悲惨さや悲しみがあふれた状況をしっかり知ることによって、より平和への気持ちが強くなるのではないかと思います。

ただ悲しいことに、過去の戦争を学ばなくても、今このときも世界では戦いが行われています。少し調べてみると、パレスチナの問題・アフガニスタン紛争・ウクライナ侵攻や紛争・内戦と呼ばれるものがたくさんあります。調べていく中で、ほとんどの記事に共通して書かれていることがあります。それは子どもについてです。

紛争の地域では『子ども兵士』と呼ばれるものがあり、誘拐によってほとんど強制的に兵士として戦いに参加させられるようです。なぜなら子どもは精神的に未熟で簡単に大人が洗脳しやすく、兵士として使いやすいからと書かれていました。それと栄養失調や食糧不足も大

きな問題となっています。紛争によって食料が不足すると、栄養失調になって抵抗力が弱まり、感染症などで死んでしまう子どもも少なくないようです。そして紛争は子どもたちから教育の場を奪います。紛争をしているところでは教育現場そのものがなく、満足に教育を受けられる子どもはほんの一部だそうです。自然災害や紛争のある地域の十五歳から十七歳の子どもの五人に一人は、一度も学校に通っておらず、五人に二人は小学校も卒業できないと知って驚きました。

日本の子どもは「子どもらしく」生活しています。体を動かし、友達と学校生活を送り、もりもりご飯を食べています。私たちが当たり前のように生活していることが、紛争地域の子どものたちにとっては、とても難しいことなのです。そういった子どもたちのために私たちができることはなんだろうと考えてみても、なかなか思いつきません。しかし、少しでも知ることによって、当たり前前に学校に行けることや満足にご飯を食べられることにありがたみを感じることができそうです。平和を願うだけでなく、現実を知ることができることを思いつく一歩だと私は思います。

# 平和への道のり

原中学校 二年

## 長谷川 詩 恩

僕はこの前の八月六日に毎年恒例の黙祷をしました。黙祷とは自分を見つめ直す時間、心を整理する時間とされています。この八月六日には第二次世界大戦のこのニュースや広島島の平和記念式典などが行われます。私達は戦争のない時代に生まれたので、戦争の恐ろしさ、原爆の恐ろしさをまだ知りませんでした。しかし、国語で学んだ『壁に残された伝言』という説明文など原爆に関する資料によって戦争のことなどをより詳しく学べるいい機会になると思いました。

終戦から七十九年、僕の身近な人で戦争や原爆のことを知っている人はほとんどいません。知っている人がいても最低で八十歳くらいなので、もう忘れていく人が多いと思います。原爆はとても恐ろしくてスイッチ一つで何千、何万もの命が奪われ、すべてがなくなる。それで命をなくした人は多くいます。核を持たず、作らず、持ち込ませず。この非核三原則を世界に広めて、核をなくしたいと願っています。戦争は国同士の争いで、武力で解決することを正義だとアメリカやその他の国は思っています。ですが、それは間違っていると思います。なぜなら、戦争は無関係な一般市民が巻き込まれ、自由や家族、大切な人をなくしてしまうものだと思いますからです。

第二次世界大戦では日本やアメリカ、旧ソ連などの世界規模の戦争になりました。死者数は世界で四千万人から五千万人と言われています。そのうちの日本の死者数は三百十万人とされています。きっかけは日本海軍によるアメリカ軍への総攻撃「真珠湾攻撃」が発端とされています。この攻撃がなければ、日本での死者はでなかったと思います。このことから僕は改めて「平和」について考えようと思いました。ですが、平和とは争いもなく穏やかな状態であることを示します。世界はこの示す平和とは程遠いと感じます。当時の兵士にもし、僕がいると考えると、本当に戦争は恐ろしいものだと実感します。

今の日本があるのは日露戦争や第二次世界大戦などの戦争により、つらい経験をしたからこそ平和な日本が存在すると思います。今の平和な環境や生活、家族などに感謝の気持ちを伝えたいと思いました。そしてこのことが世界の人々に伝わるいいなと思います。世界に伝わることで、唯一の被爆国「日本」で被爆した建物の原爆ドームなどを残して、原爆の悲惨さを後世に伝える連鎖が無限に続いてほしいです。

この戦争を知ってからわかったことは、武力ではなく、話し合いで決めるのが一番だということです。国と国との問題や不満などの意見をそれぞれの国が出し、その話し合いからどうするかを決めるという決め方がいいと思いました。武力ですべてが決まるという考えを捨てるべきだと思いました。私たちは武力で解決する戦争を知りません。ですが、戦争や核の恐ろしさを伝えることはできます。戦争を体験した人から話しを聴くことや戦争の実際の写真や資料、衣服やその場に

残されたもので展示会を開いたりすることでこのことを伝えられると思います。

今の世の中には、のんびりとした毎日を過ごす一方で、世界では紛争や戦争で困難な生活をしている子供もいます。この一つしかない地球のなかで、自分とまったく正反対の生活をしている人がいるなんておかしいと思います。そんなことは絶対にあつてはいけないことだと思えます。世界の人々が平和に過ごすには争い、武器、核をなくすことだと思っています。

平和になるための第一歩は争いをなくすことです。理由は最近ささいなことでも人を殺す、争いを起こすなどといったことが多発しているからです。だから自分でもささいなことでも争いや喧嘩けんかが起きることを防ぐことを心がけたいです。争いが一切ない平和な世界になることを僕はここから願っています。

## 全ての人に笑顔を

原中学校 二年

山岡 咲那

私は、すべての人に幸せになってほしいです。なぜ、戦争や紛争など平和を崩すようなことが起きてしまうのでしょうか。それは互いに厳しい環境であつたり、互いの考えが違つたり、文化や民族の対立が

あつたりするためだと思います。戦争や紛争は、相手が自分たちと少し違った暮らしをしているだけで起きてしまうおそろしいものです。

皆さんは、世界平和について深く考えたことはありませんか。今、世界では平和になるための課題があります。世界全体での課題一位は「人権の抑圧や差別をなくすこと」、二位が「戦争や紛争をなくすこと」、三位が「貧困や飢餓をなくすこと」です。世界中の人々が安心して暮らすためには、この課題を少しでも解決することが必要です。私たちは世界で平和な国九位にある日本に住んでいることから、課題について考えることが難しいかもしれません。しかし、今現在も苦しんでいる人、困っている人がいます。

日本が平和のためにどんなことをしているか知っていますか。日本は、例えば貧困、気候変動、地球環境問題、防災など様々な地球規模の問題に積極的に取り組んでいます。更に、軍縮、不拡散、原子力の平和的利用なども行っています。日本は、国際的なルールづくりを主導するとともに、途上国の能力構築支援などを通して、地域および国際社会の平和と繁栄に貢献しています。私もこの日本の取り組みについて素晴らしいと思いました。

私たちにとって平和とは、どんなものでしょうか。身近なものは、安心して学校へ行くこと、勉強すること、遊ぶこと、食べることです。私たちがあたりまえのように過ごしているこの時間も「平和」です。

「平和」は、SDGsにもあります。SDGsの掲げている目標十六、「平和と公正をすべての人に」です。SDGsでも世界中の人々が平和と公正の元に生きていける世界を作ることを目指しています。こういっ



た世界の取り組みに一人一人が参加することも大切だと思います。

私はこの間、ニュースや本で原爆や戦争のことを目にしました。写真やビデオなどからその時の状況、辛さがよく伝わってきました。自分の安心できる居場所がなくなり、自分の大切なもの、身近な人をなくした人もいます。もし、自分がその立場であつたら辛くて耐えるのが難しいと思います。突然すべてが奪われてすごく悲しいと思います。そう思った思いをする人がいない世の中になってほしいです。

私は、世界中どの国もが「平和」になるためには、自分の考えを主張すること、相手の意見を受け入れることが必要だと思います。つまり互いのことを尊重し合い、心を開いて接することだと思います。私たち人間は言葉という素晴らしいものを持っています。互いに助け合っていくことで世界平和につながると思いました。

これらのことから、すべての人が幸せに暮らせるには、人間関係が深く関わってくるのではないかと思います。互いに支え合ったり、自分たちの意見をしっかりと伝えること、相手を受け入れることなど色々な条件が重なって「平和」が成り立つのではないかなと思います。

私はこれから、この世の中のできる人が幸せに安心して暮らせるようになつてほしいです。勉強すること、食べること、遊ぶことなど私たちがあたりまえにできていることを簡単にできない人たちが安心して暮らせるようにしていきたいです。すべての人が幸せになれるように、ボランティア活動に参加したり、募金で支援したり、世界に伝えたりすることで、少しでも力になりたいと思います。この世の中が笑顔であふれるようになることを願っています。

## 原爆の恐ろしさ

原中学校 二年

森 田 あかり

あなたは、一瞬にしてたくさんの人の命が奪われた日を知っていますか。今から七十九年前の一九四五年八月六日のことでした。広島に原爆が投下され、広島は焼け野原となり広島にいた約十四万人の人たちが、死んでいきました。そんな広島に私は、今年の夏休みに訪れました。

まず初めに、原爆ドームへ行きました。もともとこの建物は、広島県内の物産品を展示・販売する施設として使われていたものです。今は、被爆した当時の姿のまま残っている貴重な建物となり、核兵器の残酷さや悲惨さを物語っています。

実際に原爆ドームを見つみると、足の踏み場がないくらいにレンガがぐずれ落ち、鉄骨は見たこともないくらいに曲がっており、驚きを抑えませんでした。それと同時に、ここでたくさんの人が亡くなり、たくさんの人達が苦しんでいたことが伝わってきて胸が締め付けられました。

次に、広島平和記念資料館に行きました。この資料館は、被爆資料や被爆者の遺品、証言などを通して、世界の人々に核兵器の恐怖や非人道性を伝える場所になっています。資料館にある、全身に大やけど

を負った人の写真や皮膚が溶けている人の絵、水を求めて川に飛び込む人の絵などをみて、私たちには想像もつかないぐらいい痛くて辛く苦しんでいることが写真や絵からも伝わり、私は原爆が怖く感じました。

しかし、原爆にはもつと恐ろしいことがあったことを、私は知りませんでした。大量の放射線を浴びて人体に深刻な障害が及ぼされたことにより、かろうじて生き残った人も何日かたって死んでしまったり、順調に治療が進んでいた人も急に状態が悪化してしまったりして、助けることができなかつたことがあると分かりました。他にも、何年かたったあとに亡くなった人や大人になってから亡くなってしまいう人がいました。どんなに時間がたっても、原爆のせいで安心して生きることができなかつたのです。生き残っても、生きていくかぎり最後まで苦しめられることが、原爆の本当の恐ろしさだと思います。

そして、原爆ドームや広島平和記念資料館がある平和記念公園に訪れて気づいたことがあります。それは、外国人が多いということですね。日本は世界で唯一の被爆国です。日本以外の国では原爆について見ることができないため、様々な国の人たちがこの広島へ来ていることがわかり、私は嬉しく感じました。なぜなら、原爆の恐ろしさや残酷さが日本以外にも伝わっていくからです。また、日本人だけが戦争のない平和な世の中を望むのではなく、世界中の人々が平和の大切さを知ることにより、世界中に平和への意識が高まっていくと思つたからです。

最後に、私は広島を訪れてみてよかつたなと思つました。私たちは戦争を経験したことはありません。「戦争はとてつらく残酷なものだ」

という知識はありましたが、そんな一言では表されにくい、何も悪くないたくさんの人たちが死んでいく無差別殺人のようなものであるということを詳しく知ることができて、勉強になりました。

このように、広島に原爆が投下されたあの日から七十九年がたった今、原爆が投下されたのかわからなく感じるくらい復興している広島では、原爆ドームなど被爆した建物や被爆者が数少なくなっています。日本で今、平和や戦争への意識が低くなっていると感じます。そのため今一度、平和とはなにか、昔の日本には何があつたのか、昔の人は今の私たちに何を伝えたいのか、詳しく知ることが必要です。そのことによって、ひとりひとりが平和や戦争への意識を高めていってほしいと思います。

## 平和とは

原中学校 三年

土屋 碧人

平和とは何なのか。どうしたら平和になるのか。

授業などで時々考える機会がありますが、僕には答えが出てきませんでした。調べてみると、「戦争や暴力で社会が乱れていないこと」と出てきました。

二〇二二年、ウクライナとロシアの戦争が始まりました。僕はその

ニュースを聞いた時、「え？本当に？」と思いました。僕の中では戦争は、ずっと昔に起きていたというイメージで、「今、戦争をするの？」と、とても驚きました。しかし、今ではニュースで耳にしても、驚くこともなく日常に感じるようになりました。こんな感じで、戦争に対する恐怖の意識がどんどん小さくなっていくことも怖いなと思いました。

日本が最後に参加した戦争である太平洋戦争では、終戦から来年で八十年になります。戦争の恐怖を生きて体験した方々の生の声を聞くことは難しくなってきました。僕は昨年、沖繩の「平和祈念公園」と「ひめゆりの塔」に行きました。これらの場所には、太平洋戦争の沖繩戦について色々な資料がありました。例えば、砲弾から身を防ぐための「ガマ」という場所が再現されていました。その中はとても真っ暗で、銃声まで再現されていて、とても怖く、当時の人の気持ちがよくわかりました。他にも、当時の写真や、当時の人の証言映像があつて、戦争の怖さがより一層わかりました。

他にも、広島には平和記念資料館、長崎には原爆資料館など戦争を忘れないように、伝えていく施設があります。そういったところで戦争の恐怖に触れ、戦争を知らない僕たちに伝わるのが大切だと思います。

だから、平和である基準は戦争がないことが一番大切だと思います。しかし、僕はそれだけではないと思います。例えば、アフリカなどで起きている貧困問題。貧困問題が起きている地域では、平和であると言えるのだろうか。たまにニュースで見かけますが、僕には平和

には見えませんでした。また、世界では六人に一人が極度に貧しい状態になっていて、五秒に一人の子供が飢えに關する病気で命を落としているそうです。

このように、平和の基準は人によって違って、幸せに暮らせる状態が平和だと思いました。これらの問題は一人の行動でどうにかなるものではありません。ですが、フードロスをなくすなど、小さな一歩ですが、僕にもできることはあると思います。こういった一人一人の意識が平和な世界に繋がっていくと思います。

## 語り継ぐ意味

門池中学校 二年

鈴木 愛華

原爆が落とされて七十九年。

毎年、八月六日と九日、そして終戦記念日の八月十五日がどうしてこんなに大切にされるのか、少しわかった気がします。

今年の夏、原爆ドームや大和ミュージアムに行ってきました。被爆者の話の中で原爆の影響で焼け焦げた遺体、血だらけで横たわる人がそこら中にいたと聞き、強い衝撃を受けました。「助けを求める人に対して何もできなかったことが、とても辛かった。」「私だけ生きていいのか。」「生き残ることのできた当時女学院に通っていた人が涙を

流しながら、語っていました。せっかく生き残ったのに、素直に「生きていてよかった」と思えないなんて、悲しい世界だと思いました。そもそも、殺されるべき人はいないはず。なぜそのような世界になっってしまったのか。考えても、答えを出すことはできませんでした。

日本の戦争は、原爆が長崎に落とされて六日後に終わりました。原爆投下で多くの犠牲が生まれるのはわかりきっていたはずなのに、誰も反対しないのはなぜだったのか。戦争で死んでしまった人の思い、戦争で大事な人を失ってしまった人の思いは、目の前の人の死や、焼け焦げた遺体を見たことのない私には考えることも想像することもできない悲しみだと思いました。想像できないことを想像するのは難しいです。戦争について興味がないとは思いません。私も戦争について、原爆について、これまで知りたいと思っただけではありませんでした。なぜなら、関係がないと思っただけです。今、戦争をするのではない。戦争は昔の出来事だと自分の中で勝手にそう思っていました。だけど、戦争や原爆についてこの夏たくさん考え、知ろうとしました。今は、知らなかった自分が嘘みたいで戦争や原爆について知ることができてよかったと思っています。今は、自分から戦争や原爆に関するテレビを見えています。平和記念資料館に行っても、テレビを見てもわからない言葉がいっぱいありました。戦争にまつわるテレビを見ても楽しいとは思っていません。いい気持ちにもなりません。でも、そういうことに目を向けることで、戦争への危機感を持つようになるのは大切だと思います。

戦争や原爆から生き残った人は年々減っています。夏休みに聞いた

被爆者の思いを振り返ってみると「もう二度と被爆者を作りたくない。この出来事を絶対忘れてほしくない」という強い思いが伝わりました。

原爆が落とされて七十九年。被爆者の高齢化も進み、戦争の経験が次世代に語り継げる人は減ってしまいます。これから、戦争や原爆について知らない人にどうしたらこの出来事を伝えることができるのか。そもそも伝える理由は何なのか。こんなに戦争や原爆について考えたのは初めてでした。原爆が落とされて七十九年経った今も、戦争について語り継がれている意味は、沢山の人が死んだからではない。大切な人をなくす、日常が壊れてしまう戦争をしてほしくないからなんだろうと思いました。戦争や原爆について知った知識をこれからも増やしていきたいと思えます。

戦争を知らない自分だけれど、辛い体験を語ってくださいただ方の思いを知ろうとすることはできます。そこから自分たちが平和な世界をどう作っていくか考えることもできます。私達はもうすぐ大人になります。好きなこと、興味があることばかりに目を向けるのではなく、語り継がれていることへ興味を持ち、次世代へつなげていく役割も少しずつ担っていかねばならないと思えました。

# 僕にできること

門池中学校 二年

## 蓮池 秀一

平和とは、何だろうか。この僕に何ができるのだろうか。そう思わずにいられない資料館だった。

「どうしても、行きたいところがある。」

沖縄旅行の最終日に、両親にそう言われて足を運んだ場所、ひめゆり平和祈念資料館だ。何か楽しい観光施設かと思いき、駐車場にある「めんそーれ」と書いてある古いモニュメントに僕は跨またがろうとした。うようによと動く白いウジ虫に慌てて驚き、僕は大声を上げてしまった。全く軽い気持ちで、資料館に入ってしまった。

ひめゆり平和祈念資料館とひめゆりの塔は、一九四五年の沖縄戦で亡くなった沖縄師範学校女子部、沖縄県立第一高等女学校の生徒や教師のための慰霊碑と沖縄戦の実相を伝える資料館だ。最も多くの犠牲者を出したガマの近くに建てられた。

資料館に入ると、十三歳から十九歳の生徒が僕たちと同じように勉強やスポーツに打ち込み、友だちと楽しい時間を過ごしていた展示から始まった。バスケットをやっていた写真や英語の授業を受けている様子は、今の僕たちと同じような学校生活だったことが分かる。しかし、展示室を進むにつれ、その生徒達の明るさは暗さに変化していく。

太平洋戦争の勃発、沖縄戦で両校から生徒達が沖縄陸軍病院に動員されたのだ。しかし、病院とは名ばかりで、暗く湿った壕ごうの中に粗末な木の簡易ベッドがあるだけ。その時の様子が強烈だった。糞尿や海の臭いと人でむせかえるような異臭。下顎の大半をえぐられ、ご飯を食べることも話すこともできない兵士。ゴム管で食事を喉に入れて欲しいと頼まれるが、物資不足でゴム管はない。多分口であらう部分にお米を絞り食事を与える。水をくれと尿器にたまった尿をゴクンゴクンと飲んでしまう兵士。ぼろぼろになった帯を解くと、中から次々わいてくるウジ虫。ピンセットで取ってもとつても間に合わない。配給されるピンポン球ほどのおにぎりを我慢して、兵隊に差し出すと、

「こんなんで腹一杯になるか。」

と怒号。ひめゆりの学徒は、一日何も食べていないのに。たくさん無理不尽と苦痛がその展示室にはあった。僕は、資料館入り口で何匹かのウジ虫に悲鳴を上げてしまったことを反省した。

戦争とは何なのか。平和とは何なのか。帰りの飛行機の中で、『ひめゆりの沖縄戦』という本を一気に読んだ。

「命を捨てる教育が行われた。最後まで徹底抗戦し、玉碎せよ。」沖縄戦の最大の特徴は、軍人をはるかに上回る住民犠牲にある。また、友軍と呼んだ自国の軍隊によっても殺害されるという、異常な事態が発生した。」

こんな文が印象に残っている。

僕が出した結論。平和は、自然と出来るものではないと言うこと。平和は、創っていかなくてはならないし、何のための、誰のため



の平和か考えることが大切だということ。

では、今の僕にできる平和活動とは何だろうかと考えた。夕食時、家族と兄弟喧嘩<sup>げんか</sup>について話し合う中で、ひとつの考えが浮かんだ。単純だけれど、目の前の人に温かく接すること。人を許すことや認めることではないかと思う。平和は、用意されているものではなくて、僕たちが意識して創っていかねばならないのだと、この夏休みに感じた。

## 戦争の恐ろしさ

門池中学校 三年

栃山響輝

沼津の夏祭りに行ったときに、私は、橋に見慣れぬ看板がついているのを見つけました。よく見るとその看板には、「御成橋の空襲痕」と書かれていました。昭和二十年の四月、アメリカ軍による大規模な空襲を受けたときの痕を残そうと設置された看板だそうです。私は、広島や長崎に原爆が落とされたことはもちろん知っていましたが、沼津が大規模空襲に遭っていたということは初めて知りました。少し気になる調べてみると、アメリカ軍の目標市街地面積の約八十九・五%が破壊されたことや狩野川に多くの遺体が浮いていたことがわかり、とても驚きました。

そんな中、父の実家に行った際に、平和作文を書こうと思っていると伝えたところ、祖母が沼津空襲の時のことを話してくれました。祖母はその時、小学校一年生だったそうです。学校は空襲により燃えてしまったそうです。その頃は、今のようにあちこちに電気や電灯が点いていたわけではなく、夜に出歩くのは難しいほど暗かったと言います。アメリカの爆撃機が飛んでくるといつ爆弾を落とされるかわからないので、すぐ逃げられるようにするため、空襲警報が鳴ると家の裏に作ってあった防空壕へ避難していたそうです。現在では、夜でも何も困らないくらい明るいのが当たり前ですが、当時は、明るい爆弾を落とす標的にされるので、あえて電気を消したり、黒い布で覆ったりしていたのだそうです。また、実際に空襲があった日に狩野川の橋のたもとで爆撃が終わるのをじっと待っていると、空が遠くまで真っ赤に燃えていて、震えるほど怖かったと言っていました。私も、もしそんな時代に生まれていたら、生きていく希望すら持てず、心が壊れてしまうかもしれません。そんな悲惨な時代を生き抜いた祖母は、強い人だなと思いました。

そして、この話を聞いているときに、私の曾祖父が戦争によって亡くなっていることを知りました。祖母の家には、曾祖父が戦地で戦ったことを表す勲章のようなものがあるのですが、死にたくないのに殺されて人生を奪われた曾祖父がどんなに悔しかったかと苦しくなりました。死んでから「国のために命を捧げた立派な人だ」なんて勲章をもらったって、何の意味もありません。家族がほしかったのは、勲章ではなく曾祖父の命、変わらぬ笑顔だったはずです。

私の父と祖父は、曾祖父が亡くなった硫黄島という島へ、戦死した人たちの遺骨収集に行ったことがあるそうです。戦うにあたって掘った洞窟の中はとても蒸し暑かったといいます。死と隣り合わせの極限状態の中で、水すら全くなく、ただ「お国のため」に地べたに這いつくばって戦っていた曾祖父。家族を残し遠く離れた島で戦う曾祖父は、いったい何を考えていたでしょうか。

私は、毎日いつも通りに穏やかな日常を過ごしていて、当然ながら戦うなんてことはありません。でも、祖母や曾祖父のように戦いが身近だった時代があったことを考えたとき、私はこうしていつも通りに過ごしている毎日を大事にしていかなければいけないと思いました。

世界では今、ロシアとウクライナ、パレスチナとイスラエルなど、紛争が起きています。民族問題や国の利権など、自分たちの正しさを主張したり何かを手に入れたりするために。でも、武力を使って解決するのは、絶対にいけないと私は思います。戦争によって家族を失った人の悲しみや苦しみは計り知れません。生きる希望を見つげられず、心が壊れ、恨みや憎しみの中でしか自分をつないでいくことができないう、そんな人生があつていいはずがありません。

日本は戦後、アメリカの支配下に置かれる中で、戦うこと以外の解決の仕方を知ることができました。私は、いま紛争や内乱が起きていく国々も、武力で争うのではなく、互いに話し合つてルールを作ることなどによって問題を解決することはできると思います。明日の命もわからない死の恐怖に怯える毎日ではなく、明日を明るく思い描ける日々を、世界中の一人ひとりが願ひ求めていけたらいいなと思います。

## 今の私たちが知るべきこと

門池中学校 三年

勝間田 安

九月で十五歳になる私は、もちろん戦争を経験したことはありません。いざ「平和」というものについて考えようとしても、戦争などの経験なしでは難しいと感じました。そこで、戦争を経験した祖母に話を聞くことにしました。

八十五歳の祖母は、太平洋戦争を経験しています。小学校に入学する前までは、都市部の人や建物を空襲される危険の少ない所へ移す疎開をしていたそうです。戦況が悪化すると、都市部の子供たちは「学童疎開」をし、親元を離れて子供だけで農村地帯などの慣れない土地で過ごしました。一昨年、国語の教科書に載っていた『字のない葉書』にも書かれていましたが、食べ物が入らず米も少なく配給制で、配られた切符を米や砂糖と交換していました。また、米の代わりにすいとんという小麦粉の団子を実にした汁やサツマイモ、ジャガイモを主食として食べていました。白米は、誕生日や正月など特別な日にしか食べられませんでした。そのため、栄養失調になる子供が多くいたそうです。

戦時中、多くの男性は国から「赤紙」が来れば嫌でも戦争へ行かなければなりませんでした。女性は、武器を作る工場へ働きに行かされ

たそうです。

祖母は、家の庭に爆弾をよけるための防空壕という穴を作り、空襲警報のサイレンが鳴ると、カーテンを全て閉め明かりを消して、防空壕の中へ逃げ込みました。そのサイレンの音がとても怖くて毎日泣いてしまうほどだったそうです。

祖母が小学校へ入学したのは昭和二十年、終戦の年でした。ランドセルなんかなく、着るものは着物をほどいて作ったモンペ。終戦直後の給食は、アメリカからもらった脱脂粉乳や、あらめの入ったパン、カンパンなどでした。

このように戦争を経験した祖母は、「親戚の叔父が二十一歳で戦場で病死したり、従兄弟のお父さんが亡くなったりと、身近で二人も亡くなり、家族が大変な苦勞を長い間していたことが今でも忘れられない。戦争は誰も幸せにならない。あんな思いは二度としたくないし、子供や孫たちにも絶対にしてほしくない。」

と話してくれました。

祖母から話を聞いたことで、今まで何回も聞いてきたはずの戦争の話が、全く別の話のように重く感じられ、とても心が苦しくなりました。なぜ戦争をするのか。なぜ罪のない人たちが死ななければならぬのか。望んでもいないのに殺し合う理由なんてあるのでしょうか。戦争の本当の恐ろしさは、きっと、祖母のような経験者にしかわからないのでしよう。

では、戦争を経験したことのない今の私たちには、何ができるので

でしょうか。現在の日本は「平和な国」と耳にすることが多くあります。しかし私は、戦争がない<sup>イコール</sup>平和ではないと思います。喧嘩<sup>けんか</sup>だって、意見の違いや自分勝手に起こる一種の戦争です。誰かが心に傷を負う。それは、戦争で死傷者が出ることと同じようなものだ、重く捉えるべきだと思うのです。だから、まずは争いが起きる前に、相手の意見を聞くこと。食い違ってもそれを一つの意見として尊重し、「受け止める」ことが大切だと思います。

そしてもう一つは、「過去を検証する」ことだと思いました。過去に起きた戦争などの事実を知り、どうしたら平和が保てるかを、日本国民のみならず世界中の人々が考えなければいけません。今回の私のように、過去を検証すれば考え方が変わる人も少なくないと思います。このようにすればきっと、戦争はあつてはならないことだと、誰も幸せにはなれないものだ、分かるはずでです。世界中の全ての人々の命一つひとつがかげがえのないものであり、奪われてもよい命など一つとしてありません。けれども、一度戦争が起きてしまえば、数え切れないほど多くの命が犠牲になります。戦争でたくさんものを失った人々の苦しみややるせなさに少しでも触れ、過去のこの辛い事実を知ることが、今の平和を次の時代へとつないでいくための私たちの使命だと思えます。

人間は過ちを繰り返す生き物です。でも、戦争だけは繰り返してはならないと、祖母の悲しく、そして強い顔が、教えてくれたような気がします。

# 平和の大切さ

今沢中学校 一年

## 江本空新

僕がまだ生まれていない一九四五年八月。六日に広島、続いて九日に長崎に原爆が投下された。その原爆のせいで、広島ではおよそ十四万人、長崎ではおよそ七万人の方が亡くなった。原爆の放射能により、戦争が終わってから多くの方が苦しめられたという。小学校六年生のときに、この事実を知り、(戦争はだれも傷つけない人たちをも巻き込み、取り返しのつかない被害をもたらすものなんだ。)と思った。

大昔、弥生時代から領土を巡って争いは起きていた。宗教の違い、民族や文化の違い、国境の不透明さや政策に対する不満など、歴史上様々な理由で戦争は起こってきた。勝ったとしても、その戦争の利益をだれが受けるのかよくわからないけれど、何の罪もない人々が、参加したくもない戦争に「お国のため」という大義名分の下で軍人にさせられてきたのだ。大事な家族を失ってきたのだ。そうやって苦しみ、悲しみ、もう戦争は嫌だと思っているのに、戦争はなぜか繰り返される。

ロシアがウクライナに侵攻して二年。連日、悲惨な戦争の映像がテレビから流れてくる。最初は恐怖でいっぱいだった。傷だらけの人、幼い子供が巻き込まれて、泣き叫ぶ母親、元の形がわからないくらい

に崩れた家屋。目を覆いたくなる映像が、今も流れているのに、以前のような感情にならない。怖いとは思いますが、どこか遠くの知らない世界のことのように思えてしまうのだ。何が正義なのかはわからないけれど、誰かの幸せのために、別の誰かが不幸になるのは違うということとはわかる。

この夏、沼津市立図書館で開催された「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真パネル展」に行ってきた。これがかつての日本の風景だ。まるで特撮映画の映像かのような感じだった。そう思っても怖かった。原爆のキノコ雲。この中に人がいる。人がいた。動くことのないこの写真を前にして、僕はたくさん想像をしてどうしようもないぐちゃぐちゃな気持ちでおかしくなりそうになった。子供が母親を背負って走っている写真があった。戦争で親を失った子供は、どうやって生きていくのだろう。もし僕が一瞬のうちに家族を失ったら：寂しいとか悲しいとか辛いとか、そんな言葉では片付けられない状態になってしまうだろう。

僕たちは今、たくさん犠牲の末の、戦争は嫌だという願いの中で平和を感じている。いや、世界のどこかで戦争をしている状況を平和と呼べないのだとしたら、こんなにも多くの犠牲を払って、多くの願いを込めて歴史を紡いできたのに、まだ何も学ばずに平和な世の中を実現できずにいるということになる。どうすればいいのか。誰かが考えるのではなく、僕らが考えなくては。

# 無惨な戦火で輝く平和の価値

今沢中学校 二年

友田 一輝

戦争は、無数の命を奪い、家族や友人との絆を引き裂く。爆音と共に人々の笑顔が消え、街が廃墟と化す様子は、私たちの心に忘れられない恐怖を刻む。このような悲劇を繰り返さないためには、私たちが心をついにし、平和の大切さを理解し、未来を築くために行動しなければならぬ。平和は決して当たり前のものでなく、私たちが守り続けるべき宝なのである。

私はインターネットの広大な海を航海し、第二次世界大戦の知られざる真実を探し求めた。この戦争は、一九三九年から一九四五年までの六年間にわたり、全世界を巻き込んだ壮大な悲劇だった。約七千万人の尊い命が、戦火に飲み込まれ、愛する人々との別れを余儀なくされた。それは、無数の家族が悲しみに包まれ、未来の夢が断たれた瞬間だった。特にホロコーストでは、六百万人以上のユダヤ人が命を奪われ、彼らの歴史と文化が消えてしまった。これらの数字は冷たい統計ではなく、実際に生きた人々の物語なのだ。さらに、アメリカが広島と長崎に投下した原爆は、戦争の恐ろしさを象徴している。原爆が落とされた瞬間、何も知らない人々が日常を送っていた中、空が一瞬明るくなり、まるで太陽が地上に降り注ぐかのような光が広がった。

次の瞬間、爆発音が轟き、猛烈な衝撃波が街を襲った。建物は一瞬で崩れ落ち、多くの人々が吹き飛ばされ、命を奪われた。街は火の海と化し、周りにいた人々の悲鳴が響き渡った。熱風が吹き荒れ、火に包まれた人々が必死に逃げようと走り回る姿は、まさに地獄のようだった。生き残った人々も、目の前に広がる惨状に呆然とし、何が起こったのか理解できないままだった。この原爆の瞬間は、戦争の恐怖を強く印象づける出来事だと私は思う。そして、この惨劇を決して忘れてはいけない。もう二度と同じ過ちを繰り返さないために、平和の大切さを心に刻み続ける必要があると思う。

私たちの世界において、平和は私たちにとって欠かせない大切な価値である。平和がもたらす意義は計り知れない。平和な社会では人々が安心して生活し、夢を追い求めることができる。教育や文化が発展し、経済の成長が促進されることで、国全体が豊かになる。何より、平和は人々の心に安らぎを与え、幸福感をもたらす。しかし、なぜ戦争が起きてしまうのか。戦争の背景には、多くの要因が存在する。領土や資源の争奪、民族や宗教間の対立、政治的な利害関係が複雑に絡み合い戦争を引き起こす原因となる。また戦争が引き起こす影響は、極めて深刻なものだ。その影響は世代を超えて続くことがある。このような悲劇を防ぐために、私たちは平和の大切さを理解し、維持するための努力をする必要があると考える。私自身、平和の重要性を強く感じている。平和があるからこそ、私たちは自由に学び、成長することができる。逆に戦争が起きること、私たちの生活は一変し、未来の可能性が閉ざされることを考えると、平和の価値がいかに大きいか



を実感する。

平和の実現は、私たちの心掛けによって支えられている。日常生活において、他者の思いやりを大切にし、小さな親切や温かい言葉をかけることが、心の距離を締め争いを防ぐ力となる。地域社会への参加やボランティア活動を通じて、共に支え合う絆を深めることも平和の維持に寄与する。私たちの小さな行動が集まり、大きな変化を生むのだ。

平和が無くては、未来は築けない。だからこそ、私たちは自らの手で平和を守り育てていきたい。

## 受け継いだ世界を

今沢中学校 三年

### 岩本 想

一九四四年十月二十五日、フィリピンの航空基地から九機の零戦が飛び立った。「特攻」だ。第二次世界大戦当時、日本は「一億特攻」を掲げ、これが国民の「希望」となっていた。

なんて恐ろしい世界だと思った。飛行機の機体に爆弾を積み、それに乗って相手国の艦船に体当たりをする「特攻」。飛び立ったら最後、決して生きて帰ることのない戦い方をなぜしなければならなかったのだろう。

今年の夏、特攻のドキュメンタリーをテレビで見ると衝撃を受けた。

人が乗っている飛行機が艦船に突っ込んでいく映像は、とても現実のものとは思えなかった。『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』という小説を読んだことのある私は、「特攻」がどういうものなのかを知っていた。つもりでいた。でも、どこかでそれが現実であったという事実を受け入れきれなかったのだろう。映像を見て、体の芯が冷たくなっていくのが分かった。

（あの飛行機一台一台に、人が乗っているんだ。私と変わらない年齢の若者が。）

怖くなった。

「お国のために若い命を捧げなされる、生き神さまだよ」

小説の中で、特攻隊員を見送る女性が言っていた。

当時、特攻隊は「神風特攻隊」「軍神」「神鷲」などと呼ばれ、称えられる存在だった。でも結局は、すでに戦争において優位に立っていたアメリカには通常の攻撃で対抗できないと判断され、体当たり攻撃をするしか手はないと結論づけられたにすぎなかった。命をもって国を守ることは最高の名誉だと教育され、映画まで制作されたという。

小説の中で特攻隊員たちが「俺たちが必ずや敵国に痛手を負わせて、戦争を終わらせてみせます」「少しでも日本に有利に終わらせてみせる」と言っていたことがフィクションではなかったとわかって、血の気が引いたように感じた。中には「体当たりでは現在の日本は勝つことができない」と感じていながらも飛び立たなければならなかった人もいたと知り、ショックだった。

当時の関係者のほとんどが故人となつてしまつている中、ドキュメンタリーではかつて特攻隊に所属していた人のインタビュウの様子が載せられていた。その人の話によると、十代後半の若者は「使いごろ」だと言われていたらしい。出撃命令を出されると、有無を言わず指定された日時に飛び立たなくてはならなかつた彼ら。家族や仲間との別れを惜しんだり、命乞いをしたりすることも許されなくて死んでいく彼らを「使いごろ」と呼ぶなんてあまりにもひどすぎる。人をもものように扱つている理不尽さに、怒りがこみ上げてきた。

しかも、当時の上層部は特攻を始めたことに対して「よくやった」と。当時の日本がどれだけおかしかつたか改めて思い知らされた。言えなかつただけで逆らえなかつただけでおかしいと思つていた人はいらぬだろう。その人たちの無念さを思うと悔しくて仕方がない。

「ほかの誰かを救うためなら誰かが死んでも構わないの?」「死ぬことで果たされる忠義なんて、正しいものとは思えない」未来からきた小説の主人公の言葉はそのまま私の心の声だつた。特攻志願の希望調査に「熱望」と書いた士官たち。小さな字で「望」と書くしかなかつた学徒出陣からきた若者たち。「否」とは書けない当時の状況を、私はとても想像できない。

私は、このような若者たちが犠牲となつて創つた世界に生きていく。多くのものに守られてやつと生きることができている。誰かの意図で、私のもつている正義がねじ曲げられることのないように、私は過去の事実をしっかり受けとめていこう。そして、この受け継いだ世界を平和のまま次の世代に渡そう。彼らが愛し、守ろうとしたこの国を担

うものとして。

## 世界が平和に

今沢中学校 三年

勝 亦 楓

二年前の二月、ロシアがウクライナへの本格的な軍事侵攻を開始した。それまで、歴史の授業で教科書や動画を見て学んできた私は、戦争が現実には始まつたということに、とてつもない恐怖と不安を感じていた。

戦争。望んでその選択をする人はどれだけののだろうか。戦争は嫌だ、平和な生活を守りたいと思う人の方が絶対多いはずなのに、なぜ戦争は起きるのだろうか。多くの人が巻き込まれて、一体だれにとつてどんな良いことが起こるのだろうか。戦争は繰り返される。私には理解ができない。昔からの教訓を活かせない、活かさないのはなぜなのだろう。そのときの偉い人たち同士が、感情に支配されて、冷静な判断ができなかつたからなのだろうか。「自分の気持ちは言葉で伝えようね。暴力では何の解決にもならないよ。」親も先生も、そう子供に話し育てている。子供でもわかることなのに、どうして大人は話し合いで解決できないのだろうか。戦争を始める理由は多種多様だと思ふ。でも、歴史の勉強をしていると、結局は「自分の思うままに政治を行いたい」

「相手に言うことをきかせたい」という自己中心的な欲が、そこにあるような気がしてならない。そうでもない。「血を流さなければ平和にはならない」などという結論は出さないだろうと思う。関係のない人の命を奪い、「愛国心」の押し売りで未来ある若者たちを戦場に駆り出す。こんな残酷なことの末に、平和がくるなんて、どんな想像力だろうと思う。

私の曾祖父は、戦闘機の部品を作る工場で働いていた。工場勤務だったから戦場に行くことはなかったが、曾祖父はどんな思いで部品を作っていたのか。今は訊くことはできないが、きっと複雑な思いはあったに違いない。戦争に行かなくて幸運だったと思えるような世の中の空気ではなかっただろうから。たまたま私は、曾祖父が生き抜いてくれたからここに生きている。自分のしたいことをし、夢を追いかけて、自分のために頑張ることができる。今、戦争をしている人たちだって同じだ。今生きていられるのは、昔の人が戦禍を生き抜いてくれたからなのに、なぜまた戦争という選択肢を選んだのか。

多額のお金をつぎ込んで、武力は日々進化する。新しい兵器を国の偉い人が視察したとか、パレードでお披露目したとかいうニュースが流れている。自国を守るという名目で、武装していく国々が「共に手を取り助け合う」ことなどできないと思う。兵器が外交にもビジネスにも使われる恐ろしい世の中、兵器を開発するお金で、環境問題に取り組んでいたら、今苦しんでいる人々を救っていたら、もっと生きやすい世の中になっているのでは。そういう理不尽さにもややもやする気持ちを、大人になると失ってしまうのだろうか。

世界のどこにも戦争がなかった期間というのが、わずか六年だという記事を読んだことがある。自分事として捉えられないから、今までのが教訓にならないということもあるのかもしれない。私も、ロシアとウクライナのニュースに、かつて感じた不安と恐怖を感じにくくなっている。自分や自分の家族に影響がさほどないとわかってしまったからだと思う。どれだけの人が「自分事」として捉えられるのか。戦争をなくすには、まずそこからだと思う。「自分と異なる考えの人とは、何度となく話し合って歩み寄る努力をしよう」「どんなに仲の良い間柄でも、相手の非を指摘し合える関係性でいよう」「自分が今ここにるのは、多くの人が命を守りつないできてくれたからだということをお忘れずにいよう」当たり前前の使い古された言葉だけれど、結局これに尽きるのだと思う。何か変だ、間違っているかもという気持ちを言葉にして、私はこれからも発信していこうと思う。

## 祈りと平和

市立高中等部 二年

渡辺 かのん

広島川の川に立つ祈り

大きなきこの雲が立ち上がる

一瞬で奪われた愛する人

声なき叫びが風に乗り  
無数の魂が空を彷徨う

長崎の丘に立つ祈り  
街を覆いつくす炎

あの日の悲しみを胸に  
平和を願う心の灯  
消えぬようにと手を合わせる

傷ついた地に降り立つ平和

未来を見据えた強い心  
平和を求める人々の声  
愛と希望を掲げ進む

科学の力がもたらした  
未曾有の破壊の力

人々の未来を奪い去り  
苦しみの中に投げ込む

広島と長崎の記憶  
忘れぬための物語

涙の雨が降り注ぐ日  
語り継がれるその悲劇

平和の礎となる日まで

二度と繰り返されぬように

核の恐怖、科学の力

その現実を見つめ

平和の大切さを学び

未来を築くための力に

未来に向けた静かな誓い

## 未来を信じて

市立高中等部 三年

伊 海 花 音

世界は今、平和といえるでしょうか。私が考える平和は、世界中の人々が当たり前の日常を送り、自由に暮らすことだと思います。毎日暖かい布団で寝て、美味しいご飯を食べて、学校や仕事に行つて過ごす生活は、現在ほとんどの日本人は当たり前のように行つています。私たちの国は、一九四五年の八月十五日に終戦してから戦争がなく、穏やかな国となりました。しかし、世界ではまだまだ争いがあります。

テレビやSNSを見ると、ロシアがウクライナに侵攻していることや、イスラエルがガザ地区に攻撃を加えていることなどの話題が絶えません。このような争いによって多くの犠牲者が出ていて、直接戦争に関係していない日本でも食品や原油の価格上昇などの影響があります。たくさんの方が犠牲になり、人々にとっての大切なものが失われる戦争は本当に悲惨なことです。

私は、このような戦争についてさらに理解を深めていくために祖父に話を聞きました。祖父は一九四四年に生まれ、一歳の時に終戦を迎えました。あまり記憶は無いのですが、防空壕くわうこうの中によく隠れていたことは鮮明に覚えているそうです。戦後の生活はやはり苦しくお米は簡単に食べられなかったため、麦や雑穀を食べていたそうです。満腹になるまで食べられないことが当たり前で、我慢の積み重ねをして過ごす生活は本当に大変だったと思います。

以前、私は学校の平和学習で『はだしのゲン』という映画を見ました。この映画は小学生でも見たことがあったのですが、社会の授業や平和学習で戦争について学んでから見るとより感慨深いものでした。その中で印象に残ったのは、原爆投下の二十分から一時間後に降り始める黒い雨です。小学生の頃は、なぜ降るのか理解できませんでしたが、今となっては泥やすすを含んだ油のような粘り気のある雨だと分かりました。被爆で体に大きなダメージを負い、限界を感じていた人が黒い雨を飲み、安心してそのまま亡くなってしまったシーンをよく覚えています。また、原爆から放出される放射線を浴びたことで細胞が破壊され、髪の毛が抜けてしまう後遺症で苦しんでいた主人公が印

象的でした。なによりも、大切な家族が目の前で亡くなってしまふ悲しさ、悔しさは計り知れないと思います。そのような中、主人公の母親が主人公に「悲しんでいる場合じゃないよ」と前向きな言葉をかけていて、当時の人々は本当に強いと感じました。

このように、かつて日本で起きた悲惨な出来事を自分から知ろうとすることで、現代の私達の生活にありがたみを感じます。戦争以外にも地震や富士山噴火などいつ起こるか分からない災害で苦しむかもしれません。自分が明日生きているかどうかも分かりません。平和は永遠に続くとは限らない中で、一日一日を噛み締めて過ごすことが大切です。戦争は日本で今後百パーセント起こらないとは言いきれませんが、世界を平和にすることは不可能ではないと思います。

戦争を起こさないため、平和を創造していくために私達が出来るところを考えてみました。終戦から七十九年経った今、戦争を体験した人や被爆者は年々減っています。本当の恐ろしさを語れる人が少なくなっている中で、次に語り継いでいくべきなのは私達だと思っています。私一人の力では難しいと思いますが、十代から二十代の若い世代が協力して戦争について知ろうとすることが平和を作る第一歩になると思います。戦争で亡くなってしまった人達の死から教わったことが決して無駄になることがなく、世界の未来が平和になることを信じて。